

EARTH COMPANY

Impact Stories

世界の未来を変えるチェンジメーカーたちが
人生をかけて SDGs に取り組むその理由



INDEX

Founders' Message 3

Our Support 4

Impact Hero 2015 Bella Galhos 6

Impact Hero 2016 Robin Lim 18

Impact Hero 2017 Kathy Jetñil-Kijiner 30

Impact Hero 2019 Wai Wai Nu 42

Impact Hero 2021 Arief Rabik 54

How to Donate 66

FOUNDERS' MESSAGE

2008 年、ハワイ。私は留学先のハワイ大学大学院で、ベラ・ガルヨスという東ティモールの女性と出会いました。

ベラは 43 人兄弟がいたこと、独立のために闘う少女兵であったこと、亡命するための映画顔負けの国外逃亡劇…「この小さな体のどこから出てくるのだろう」と思うような熱量と声量で、その壮絶なライフストーリーを毎日、面白おかしく話してくれました。ユーモアたっぷりの話の中には、独立したばかりの東ティモールへの強い思いと未来への夢があり、「この人はいつか東ティモールの未来を変える。彼女がいつかアクションを起こす時には、必ず支援しよう」と当時、密かに心に決めていました。

それから 6 年経った 2014 年、ベラから東ティモール初の環境学校を含む「グリーンビレッジ事業」の構想を聞き、その必要性と影響力に確信を持って支援を始めたのが Earth Company 設立のきっかけです。

当時はまだスタッフもボランティアのみで、彼女の団体の一部となって、可能な限りの全てを寄り添って支援を行っていました。それが現在私たち一般社団法人 Earth Company が行う、アジア太平洋地域で SDGs に人生をかけて取り組むチェンジメーカーを「IMPACT HERO」として年に 1 人選出し、3 年間の支援を行う IMPACT HERO 支援事業の原型です。

私たちが団体を設立したのは、紛れもなく、ベラの人生、生き様に心を打たれたからでした。

ユーモア交えど、社会課題の当事者・犠牲者だからこそ語ることができる彼女の言葉には重みがあり、揺るぎない信念、何かを超越した覚悟、現状を変えるための不屈の精神、そして何より東ティモールとその人々に対する愛に満ち溢れていました。

当事者だからこそ、心を動かすことができる。

当事者だからこそ、社会的弱者が未来を託す。

当事者だからこそ、起こせる変革がある。

だからこそ私たちは、そのような人たちを厳選し、全力で支援しています。

この本では、人生をかけて SDGs に取り組む、チェンジメーカー「IMPACT HERO」たちの激動の半生を綴っています。

今までに選出した IMPACT HERO は 5 人ですが、こうして見ると「よくこんな人たちが 5 人も集まったな」と思うほどの顔ぶれですが、世界にはまだまだいるのです。

唯一無二のチェンジメーカーであり、私たちの心を揺さぶった彼らの生き様がみなさまにも届き、生きる勇気を与え、次世代に継ぐ未来のためにアクションを起こすきっかけになりましたら幸いです。

一般社団法人 Earth Company 共同創設者
濱川明日香・知宏

一般社団法人 Earth Company 概要

2014 年 10 月設立。次世代につなぐ未来のために、人と社会と自然が共鳴しながら発展するリジェネラティブなあり方を追求すべく、①インパクトヒーロー支援事業、②インパクトアカデミー事業、③エシカルホテルの 3 つの事業を展開している。インパクトヒーロー支援事業では、1 年に 1 人、アジア太平洋の並外れた変革力を持つチェンジメーカーを選出し、3 年間にわたるとことん寄り添う支援を提供している。7 年間で 5 人のチェンジメーカーを支援し、累計寄付額は 1 億 9273 万円。累計受益者数 103 万人以上となる。

OUR SUPPORT

Earth Company が支援を提供してきた
アジア太平洋地域のチェンジメーカー
「IMPACT HERO」たちの活動概要



Impact Hero 2015 ペラ・ガルヨス

活動国：東ティモール

運営団体：Leublora Green Village 代表

活動概要：環境教育、エコツーリズムなどによる地域経済活性化

支援金総額：1,352 万円

支援概要：環境学校設立、エコヴィラ設立、マーケティング支援、NGO 経営コンサルティング

取り組んでいる SDGs：



2



Impact Hero 2016 ロビン・リム

活動国：インドネシア・フィリピン

運営団体：Bumi Sehat Foundation 代表

活動概要：貧しい妊産婦に対する無償医療の提供、災害支援、助産師育成など

支援金総額：3,153 万円

支援概要：助産院設立、災害支援活動支援、ユーストレーニングセンター設立、来日ツアー開催
取り組んでいる SDGs：



3



Impact Hero 2017 キャシー・ジェトニル=キジナー

活動国：マーシャル諸島・ミクロネシア・アメリカ

運営団体：Jo-jikum 共同創設者

活動概要：気候変動や環境問題に取り組む次世代リーダーの育成

支援金総額：1,441 万円

支援概要：ユースセンター設立、来日ツアー開催、COP22 登壇支援、NGO 経営コンサルティング
取り組んでいる SDGs：



4



Impact Hero 2019 ウェイウェイ・ヌー

活動国：ミャンマー

運営団体：Women Peace Network 代表

活動概要：民族間の平和構築と平和的平等の促進

支援金総額：1370 万円

支援概要：ヤンゴン・ユース・リーダーシップセンター運営支援、ミャンマー軍事クーデター緊急支援、米国内での団体設立支援
取り組んでいる SDGs：



5



Impact Hero 2021 アリーフ・ラビック

活動国：インドネシア

運営団体：Environmental Bamboo Foundation (EBF) 代表

活動概要：気候変動・森林保全・地方創生・女性のエンパワメント

支援概要：助成金申請支援、日本でのマーケット開拓、団体基盤強化支援
取り組んでいる SDGs：



1 貧困をなくそう



4 質の高い教育をみんなに



5 ジェンダー平等を実現しよう



Impact Hero 2015

Bella Galhos

環境・政治活動家

人身売買、虐待、少女兵、亡命…

いくつもの困難を乗り越えた未来の大統領候補

インドネシア軍支配下の東ティモールで、多くの困難を乗り越え、当時では珍しい女性の活動家として独立運動に貢献。独立後は大統領補佐官として、国の再建に尽力。その間、教育と持続可能な発展の必要性を感じ、2015年、日本からの支援を得て山の上の農村地区に東ティモール初の環境学校を開校。その後、オーガニックレストランや農園、エコヴィラを併設したルブロラ・グリーンヴィレッジを設立。2022年の大統領候補として注目されている。

478

ベラが設立した
環境学校で学ぶ
子どもの数(2018年)

2078

ルブロラ・
グリーンヴィレッジの
訪問者数(2018年)



BELLA'S STORY

3歳の時、インドネシア軍がやって来た

1972年、私は東ティモールに生まれました。3歳のときにインドネシア軍が東ティモールを不法占領し、同じ両親のもとに生まれた6人の兄弟のうち2人を飢餓で亡くし、父は拉致・投獄されました。

インドネシア軍の支配が続くなか、私たちの日常には暴力が溢れていました。小学校の時は、インドネシア軍が学校に何度もやってきて、女子は激しく抵抗するも強制的に注射をされ、子どもが産めない体になりました。暴力は家庭内でも日常茶飯事。父は私の母にひどい暴力を続け、まるで男の子のようにやんちゃだった私を卑下し、私にも暴力をふるいました。そしてまだ幼かった私を、たった5ドルでインドネシア軍に売りました。父にとって、男勝りだった私は5ドルの価値しかなかったのかもしれませんが。

それでも母は、命懸けで私を軍から救い出してくれました。その後も父からの暴力は、母や私、そして姉妹に対しても止まることはなく、母の太ももに父が刺さした錆びた釘を、泣きながらとったことは、未だによく思い出します。

家庭内暴力は当時の東ティモールでは珍しくありませんでしたが、あまりにもひどい暴力に「このままでは長く生きられない」と、母は父と離婚することを選びました。女性から離婚を申し出るのはタブーで非難的になるため、大変勇気があることでしたが、母は覚悟を決めてやり遂げたのです。私はこの後、人生で何度も困難に直面しますが、そのたびにこのことを思い出しました。母はあれほど辛い状況を乗り越えた。母にできたなら、私にもできるはずだと。

唯一の少女兵として闘い、直面した大虐殺

暴力が日常化した環境で育った私は、暴力のない社会を切実に願い、この国の未来のために、16歳の時に死を覚悟して少女兵として地下組織に入り、独立解放運動に身を投じました。東ティモールでは、「女性は家庭に入り、子どもを産んで育てるもの」という価値観が一般的だったので、独立運動を行う女性はいませんでした。反対もされましたが、私はそれでも「自由」のために戦うことを選んだのです。

しかし、事件が起きました。1991年11月のサンタクルス虐殺です。この日、首都ディリで独立を求めるデモ行進を行っていた市民に対し、インドネシア軍が

無差別に発砲し、270人以上が犠牲になりました。私もデモ行進をしていた1人でしたが、外国人ジャーナリストに助けられ、命からがら生き延びましたが、この虐殺で多くの大切な仲間を失いました。

サンタクルス虐殺は世界的なニュースになりましたが、東ティモールではこのような虐殺は常にありました。しかしこの日、大切な仲間たちを目の前で失い、「この国にいては、私も殺されてしまう。生きてこの国を救うには、この国から出なければ」という思いを強くしました。

国外逃亡のための過酷なダブルライフ

インドネシア軍の支配下だった当時、東ティモールの国民はパスポートを持たせてもらえるわけではなく、国外に出ることは許されていませんでした。国外に出る唯一の方法は、インドネシア軍に入り、認められて、軍のプログラムの一環で派遣されること。そのために私は、水面下では独立解放運動を行いつつも、国外逃亡のためにインドネシア軍に入隊するという、ダブルライフを始めました。

当時は、東ティモール人が、自分の身を守るためにダブルライフを送るのは珍しくなかったのですが、それは新たな「地獄」の始まりでもありました。このような紛争状態では、軍に入隊しても簡単に信用してもらえません。軍への忠誠心を試すため、軍はありとあらゆる肉体的、性的暴力を与え続けました。それはとても言葉で表現できるようなものではありません。それでも私は、「この国を変える」というひとすじの希望と信念を胸に、どんな暴力にも耐え続けました。

そして3年が経ち、軍はようやく私を信用し、ユースプログラムの一員として、カナダのバンクーバーへの派遣が決まりました。出発の朝、私はアメリカに住む親戚の住所を書いたメモを、細く丸めてズボンのゴムの中に隠しました。出国の際は、服を全て脱がされ、隅から隅まで調べられました。紙が見つければ私は殺されてしまいます。心臓の音が相手に聞こえるんじゃないかと思うくらいドキドキしながら、祈るような気持ちで調べが終わるのを待ちました。私は無事に身体チェックを通過しました。22才でようやく、チャンスがやってきたのです。

命がけの脱走で勝ち取った「自由」

カナダは私にとって、全く新しい世界でした。ホテルに着いて数日は、エレベーターがただ行き来するのを眺めていました。紛争で荒れ果てた世界しか知らなかった私にとって、そんな文明の利器はとても魅力的でした。

数日経ち、私はアメリカのロードアイランド州に住む叔父に手紙を書き、その投函をホテルの受付にお願いしました。3日後、叔父からホテルの部屋に電話がありました。これで叔父の力を借りてここから抜け出せると思うと、はやる気持ちを押えられませんでした。私は叔父に、「亡命を手伝ってほしい」と頼みました。叔父は快諾し、バンクーバーで東ティモールの独立運動をしているエレーヌ

に連絡をとり、早速私に連絡をくれました。「東ティモールの伝統織物のスカーフをしたエレヌという女性がホテルから百メートルのところに迎えに行くから、その車に乗りなさい」と。

エレヌと会う日、怪しまれないように私は数枚の服をレジ袋に入れてホテルを抜け出しました。大きなスーツケースと、インドネシア軍から支給された服は部屋に残していきました。「Thank you, but no thank you.」というメッセージと共に。

地獄のような日々を耐え、待ち望んだ「自由」まで、あと百メートル。不審に思われないか、見つかるのではないかと不安で、心臓が破裂しそうですが、なるべく普通にゆっくりと歩きました。やがて、胸に「Free Timor-Leste」とロゴの入ったシャツに東ティモールの伝統織物を首に巻いたエレヌを見つけました。そのスカーフにも、「Free Timor-Leste」と書いてありました。私の母と同年くらいの彼女をみて、少しホッとしたのを覚えています。バンクーバーの路地でエレヌに会ったこの日を境に私はついに「自由」を手に入れ人生が大きく変わったことに、その時はまだ気づいていませんでした。

私の脱走にインドネシア軍が気付くのに、時間はかかりませんでした。軍はすぐに私を探し始め、私はエレヌの家で自分の名前やパスポートがテレビのニュースになっているのを、背筋が凍るような思いで見っていました。それでも、カナダで独立運動をしている仲間たちがすぐに私に連絡をくれて、仲間の助けもあり、数か月後に私は政治難民として認定されました。私は北アメリカで亡命した、初めての、そして唯一の東ティモール人女性になりました。



平和な国で気づいた自らの「暴力」

その後数年間、私はエレヌや彼女の友達、そして多くのホストファミリーと共に過ごしました。私は彼らに、「あなたはすぐに怒るけど、そんなに暴力的だといつか事件を起こして逮捕されちゃうわよ」とよく指摘されました。暴力が日常に溢れる東ティモールでは当たり前だった私の振る舞いが、暴力のない平和な環境では「攻撃的」であり「暴力的」であると知り、私は衝撃をうけました。東ティモールで一度逮捕され、ひどい目に遭ったトラウマがあったので、「逮捕だけは嫌」というと、彼らは私が変われるようにカウンセラーを紹介してくれました。

その後カウンセリングは4年間続きました。カウンセラーは、私の怒りや暴力の根本的な問題は母親との問題にあるといいました。そして、母との問題を解決しなければ根本治療はできないと、母と二人で話すことを進められ、母とオーストラリアで会えるようチケットを手配してくれました。

亡命してから母と会うのは初めてで、私の心は激しく動揺し、何から話したらいいのかまったく言葉が見つかりませんでした。やっとの思いで出てきた言葉は、長い間しこりのようにあって、心の底から聞きたかったことでした。

「どうしてお母さんは、兄や姉の暴力から私を守ってくれなかったの？どうして止めてくれなかったの？」

長い沈黙の後、母は答えました。

「本当にごめんなさい、ペラ。私は怖かったの。もし彼らの暴力を止めたら、今度は私が殴られる。あなたが唯一の頼りだったの。ごめんなさい、ペラ。あなただけが私を守ってくれていたの」

私は言葉を失いました。母は私が知る限り、最も勇気ある女性でした。そんな母も、暴力に怯え、自分自身を守ろうとしていたとは、夢にも思っていませんでした。

また来てしまったお別れの日、東ティモールに戻る母に、私が先に出国するスケジュールに変更してくれないか、と頼みました。4年前に国外逃亡した時はもう2度と会えないかもしれないと思った母にせっかく再会できたのに、また別れないといけない。母が乗る飛行機を見送るのは、考えただけでも耐えられなかったのです。

後日、その場にいた知り合いから聞きました。気丈に振舞って見送ってくれた母ですが、私の姿が見えなくなるまで手を振ったあと、「東ティモールはすぐそこなのに、あの娘を連れて帰ることもできない…こんなに近くにいたのに…」と泣き崩れて失神した、と…。

ついに独立、そして国の再建へ

カナダでは6年間、独立運動に身を投じました。カナダ全土だけでなく、日本を含めて80カ国以上を周り、東ティモールの独立のために海外から働きかけました。そして1999年、国民投票により独立が決まってようやく国に戻れるようになるとすぐに私は帰国し、国連開発計画で働き始めました。

しかし私は、すぐに気づきました。どんなに多くの国連機関が国の再建を支援してくれても、本当の意味での「国づくり」はできないだろうということに…。政府の重要なポジションについた人々は、戦争を生きて、小学校すら卒業していない老人たちでした。また450年間ポルトガルに支配され、その後24年間インドネシアの支配下にあったこの国の人々、若者たちの心はすっかり荒廃し、向上心や前向きな意欲を失ってしまっていました。この国を本当の意味で再建するために本当に必要なのは、人々が心を取り戻すことと、若者たちへの教育でした。

そこで私は、アメリカ政府機関から奨学金を受け、教育学と女性学を学ぶためにハワイ大学に留学しました。Earth Company 創設者のアスカと出会ったのはこの時です。この出会いが、後に私の夢を実現し、東ティモールの未来を変える力になるとは夢にも思わずに、当時は独立した祖国への溢れる思いを、毎晩のようにアスカに話していました。

卒業後、私は帰国し、39才のときに大統領補佐官に任命され、愛する祖国の再建に再び携わることになりました。当時の大統領は、学のある若い人を行政にもっと巻き込まないとこの国の成長はない、と危機感を抱き、留学経験のある若者をたくさん起用したのです。国の現状を理解するため、大統領と私は何年もかけて、国中を視察しました。車でいけない地域には、何週間もかけて歩いていきました。テレビのある家はほとんどないので大統領の顔を知ってる人も少なく、大統領と信じてもらえないこともありました。

宿もないので、夜は人々の家々を渡り歩き、彼らが住む土床の貧しい家に大統領と雑魚寝しました。電気はもちろん、水道など最低限のライフラインもままならない貧困地域も多く、腕時計を見たことない人が、私の腕時計を見て「これはなんだ」と不思議そうに聞くこともあり、大統領と私は、ここがアジアの最貧国であると改めて実感しました。

何もないからこそ、描ける未来がある

東ティモールの唯一の国家収入は石油資源で、それさえもあと30年もすれば枯渇するといわれています。他に産業はなく、仕事を求めて地方から若者が集中した都市はスラム化していました。暴力の中で生きてきた大人も、そんな環境で育った子どもも、荒んだ心が、独立を果たしたからといって希望に満たされて変わるわけではありません。

国民の約半数を占める15歳未満の子どもたちには、十分な教育環境がないだけでなく、夜中の2時に子どもがスラム街を歩いても誰も気に留めないほど、子どもの未来に大人たちも無関心でし

た。現状の課題はあまりにも多いですが、悲観する必要はありません。この国はまだ独立したばかりです。貧しくまっさらな状態だからこそ描ける、新しい未来があります。

だからこそ私は、石油資源に依存し「大量生産・消費主義型」で環境破壊を繰り返す 20 世紀の資本主義の経済発展ではなく、自然と人の暮らしが共に成長する新しい経済モデルを描きました。それが、ルブロラ・グリーンビレッジ（以下グリーンビレッジ）の構想でした。

母の思いを次世代に繋いでいけるように

グリーンビレッジは、首都ディリから車で 3 時間ほどの山間部の貧困地域マウベシの 18,000 平米の広大な土地に建設し、私は私財を投じてこの事業に人生をかけると心に決めました。この場所を決めたのは、独立運動のリーダーだった祖父からの遺産だったことありますが、母の故郷だったことも大きな理由でした。

私にとってグリーンビレッジは、持続可能な未来への希望そのものでした。そしてそれ以上に、母の生まれた土地で、母から教えてもらった大切なことを次世代を担う子どもたちへと受け継いでいくという意味もありました。

母は、私の人生に大きな影響を与えてくれた女性です。父にひどい暴力を受け続けながらも、優しさと愛を失わず、娘の私に「見返りを求めない愛」「分け合う心」「許し合う心」を教えてくれました。それは単なる言葉の教えではなく、まさに母の生き方そのものだったのです。

たとえば、私の家は貧しく毎日おかゆやほうれん草や茹でバナナばかりを食べていましたが、そんな私たちの食料を母はもっと貧しい隣人にあげていました。その家には私たちよりも小さな子どもがいて、お腹を空かせて泣いていたからです。

「ママ、明日私たちが食べるものはどうするの？」と私が文句を言うと、「あの子たちは、今日食べられなければ死んでしまうかもしれない。私たちには、明日は何か食べ物が入るかもしれないでしょう？」と私を諭しました。

教師だった母はよく「飢えをなくすために食べなさい。渴きをなくすために飲みなさい」と話してくれました。幼い私にはこの真意がわかりませんでしたが、大人になった今なら母が伝えたかったことがわかります。これは、「お腹がいっぱいになるまで食べる」ということではなく、「自分のお腹を満たしたら残りは人と分かち合いなさい」という意味だったのです。



そんな母の葬儀には 8000 人もの人が訪れました。何故こんなにも多くの人が訪れるのか私は不思議に思っていました。そこで話を聞くと、母は勉強ができない環境にいる子どもや、勉強についていけない子どものために、病院や貧しい家庭を訪れて毎週 2 回、勉強を教えていたことを知りました。母の帰りが遅い日、私たちを放って何をしているのかいつも疑問に思っていたのですが、母はこんなにも多くの人の心に残り、そして感謝されるような素晴らしい活動をしていたのです。私はそんな母を誇りに思い、母のように生きたいと思いました。



もし自分が必要以上のものを手に入れられるようになったらそれは周りとは分かち合うとき。どんなに経済的に豊かになっても、お金は天国にはもっていけない。でも、人と分かち合えば、それが人々の心につつまでも、いつまでも残る。人生の豊かさは、人々の心に、記憶に生き続けることにある…。

見返りを求めない愛や分かち合いの精神は、母がその生き様を通じて教えてくれた大切な教訓であり、私の生きる指針となっています。母の思いを受け継ぎ、次は私がこのグリーンビレッジで、母の故郷のマウベシに生きる次の世代へ教えていく番です。

突然の絶望と日本からの救いの手

政府からの約 8000 万円の援助も決まり、グリーンビレッジの設立計画はスタートしました。しかし 2014 年、計画の途中で突然、「今までに女性でその規模の助成を受けた人はいない」という理由で、約束されていた援助がすべて白紙になってしまいました。

暴力のない社会を実現するために、10 代のころから闘い続け、そのための第一歩をようやく踏み出したところで行き詰まってしまい、途方に暮れていた私に、アスカはいいました。「ベラ、これは絶対に実現させよう。お金は私たちがなんとか集める」と。

それはいくら日本人とはいえ、とても個人が簡単に工面できる金額ではありませんでしたが、「あなたが国のために行動を起こすときには、絶対に支援すると決めていた」と彼女はいい、私のために団体を設立し、日本で寄付を募ってグリーンビレッジの核でもある環境学校建設のための約 500 万円を集め、さらに 3 年間の支援を約束してくれたのです！

2015 年 5 月、環境学校がついに完成しました。その後、事業運営のノウハウがない私に、アスカ

やトモは何時間もかけて事業計画を一緒に練ってくれ、3年の間に1つ1つ私の夢が実現していきました。子どもたちが笑顔で心を育む環境学校も、貧しい女性たちがオーガニック農業で生計を得られる農業組合も、収益事業であるエコツーリズムの柱となるエコヴィラも、3名の教師の2年分の給与まで何もかも。私たちも仲間を集めて土地を開墾し、オーガニック農園や、採れた収穫物を提供するレストランは、自力で建てることができました。スピーカーとして推薦してくれたTEDxトークは世界中で見られ、さらにはウェブサイトやリーフレット、プロモーションのビデオ制作まで行ってくれたおかげで、世界20カ国から人が訪れオーストラリアからの寄贈でソーラーパネルも設置されました。

それは白紙になったグリーンビレッジの計画がたった3年で現実になっていくという、まるで夢のような、奇跡のようなあっという間の3年間でした。



何もなかった広大な荒地は 今や東ティモールで最も美しい場所に

2015年5月に環境学校ができた後もしばらくは、私は大統領補佐官としての仕事を続けながら、私財を投じて学校を運営していました。環境学校は週末だけの開講で、私は任務があるディリとマウベシを往復しながら、広大な土地を耕し、農作物や花を植えました。地域の子どもたちは、環境学校が開催されない日もここに来て、一緒に農作業を手伝ってくれました。大切に育てた作物が美味しい食べ物に変わる。土と共に生きるその体験を通じ、子どもたちの表情は明るく、穏やかになりました。

オーガニック農業で生計を得られるという新たな希望は、マウベシの貧しい女性たちの生きる希望となり、彼女たちは一生懸命畑を耕しました。収穫物はディリで販売し、生計を得て彼女たちの家計

も家族の健康状態も劇的に改善し、子供達が学校に通えるようになった家庭も増えました。

そしてグリーンビレッジが少しずつ収益をあげられるようになり始めた 2018 年、私は大統領補佐官の仕事を辞め、グリーンビレッジの運営に専念することになりました。3 年前には何もなかった広大な荒れ地が今は、美味しい農作物と色とりどりの美しい花、そして人々の生きる希望がある豊かな大地に変わっています。そして歴代の大統領も「東ティモールで最も美しい場所」「この事業モデルを国内の全地域に展開すべき」と、訪れる誰もが称賛してくれるような土地になったのです。

グリーンビレッジは私が描いた夢ですが、私一人で実現できたわけではありません。日本を始め各国からの寄付、Earth Company の支え、地域の人々の思い、私の家族の思いと、すべてがあって初めて実現したことです。特に私を救い、私の人生の指針となってくれた母の影響ははかり知れません。



社会的弱者を生み続ける社会は、発展しない

私は東ティモールで唯一、LGBTI であることを公表している女性です。そのため LGBTI に関するカンファレンスやイベントでよく話をする機会があります。近年は、オーストラリアからの助成で、東ティモールの LGBTI の子供達を支援するプロジェクトを始めました。東ティモールでは、LGBTI の子供は親から虐待を受けたり捨てられたり、教師や友達からも追いやられ、学校にも行けず就職もできない青少年がたくさんいます。そんな彼らの駆け込み寺となるシェルターを建て、雇われずにも生計を立てられるよう、職業訓練を行なっています。親に虐待を受けている場合には、親に話しに行き、





LGBTI に関しての理解を深めるよう促します。東ティモールでは私は知られていて信頼があるので、私が彼らの家に出向いて説明すると、初めてこの話題に関して耳を貸してくれることも少なくないのです。

「環境活動から LGBTI にシフトしたの？」と聞かれることもあります。私にとって、グリーンビレッジでの青少年・女性支援と、LGBTI の若者支援は同じことなのです。全ての人が、基本的な人権を守られ、教育を受け、発展する機会があるべきです。この国は人口の半分が若者です。そして人口の半分が女性。今は若者と女性の多くが社会的弱者ですが、社会的弱者を生み続ける社会に、真の豊かな未来はありません。今社会的弱者となっている人たちの中に、どれだけの才能や可能性が眠っていることか。私は、立場に関係なく、一人一人が尊重され、個々の可能性が最大化される社会を作りたいのです。それがこの国の発展に貢献すると信じていますから。

私はよく、「あなたは人生で散々酷い目にあってきたけど、あなたに『怒り』や『憎悪』はないの？あなたを苦しめた人たちを、あなたは許せたの？」と聞かれます。私は確かに、長年ずっと怒っていました。でも近年、怒りからはポジティブなものが生まれにくいことに気が付きました。怒りは平和を作らない。「愛」でしか、平和を生むことはできないのです。

2022 年、私は大統領選に出馬します。元大統領でノーベル平和賞受賞者であるジョゼ・ラモス＝ホルタ始め、若者、女性、マイノリティ、変革を求めるたくさんの人たちが支持してくれています。大統領に選ばれようが落選しようが、愛するこの国の未来のために、私は闘い続けます。私の娘が、そして次世代を担う若者たちが、私が生きた苦悩を経験しなくてすむように。



Impact Hero 2016

Robin Lim

助産師

“ 貧困は命を諦める理由にはならない ” を
信念に 25 年無償で赤ちゃんをとりあげ続け
命の大切さを伝える愛の伝道師

34 歳のときに、最愛の妹を妊娠合併症で失った経験から母子に寄り添う助産師として生きることを決意。移住先のバリ島での最大の死因が産後の大量出血である事実を知り、貧しい妊産婦に 24 時間 365 日無償医療を提供するブミセハット国際助産院を設立。その後 25 年以上、世界中からの寄付だけで助産院を運営。一般診療や助産師研修、食糧支援や災害地での緊急医療支援なども幅広く提供する、地域の「駆け込み寺」となっている。

9000+

ブミセハット国際助産院設立から
今までに助産院で生まれた
赤ちゃんの人数

128,275

ブミセハット国際助産院
サービス受益者総数
(2021 年)

ROBIN'S STORY

軍人の娘、平和活動家になる

心に愛と平和があれば、人類は国籍も人種も超えて1つになれる。

私のこの信念には、私自身の生い立ちや家族が深く影響しています。私の母はフィリピンのルソン島の山岳地域の出身で、父はアメリカ人の軍人でした。父が沖縄基地に駐在していた時に母は私を身籠り、アメリカのアリゾナ州で出産しました。その後、アリゾナ州、ニュージャージー州、ワシントン州など、各地の米軍基地を転々として過ごしました。4年生の頃は沖縄にも住み、5年生でフィリピンに引っ越しました。私が住んでいたころの沖縄には、不発弾など戦争の痛ましい記憶があちこちに残っていましたが、美しい海や自然を探検しながら穏やかな日々を過ごしました。引越しは多かったですが、行く先々で出会う人々はとても温かく、素晴らしい出会いに恵まれていて、たとえ国籍、人種が違って私たちには何か「共通するもの」があり、それが違いを超えて人と人を繋いでいると子どもながらに感じていました。そのとても温かい「共通するもの」こそが「愛」であると、今ならわかります。

私の母方の祖母は、フィリピンのコルディレラ山岳地域に住むヒーラー兼産婆でした。私がまだ幼かった頃、祖母が私の肌に「Anting-Anting」を入れたと言われたことがあります。言い伝えでは、「Anting-Anting」は小さな種のようなもので、入れられたら、その人の魂に課せられた天命を果たさずにはいられなくなる力を持っています。今のような私の生き方は、祖母があのに蒔いた「Anting-Anting」がそうさせているかもしれません。

温かな出会いのなかで幸せに過ごしていましたが、私が7年生の時、父がベトナム戦争に出征しました。13ヶ月後、戦地から帰ってきた父は、変わり果てていて、重い心的外傷後ストレス障害（PTSD）を患っていました。

ベトナム滞在中、父は「アジア人には魂がないから、殺しても構わない。できるだけたくさん殺せ」と命令されていました。想像してみてください。妻はアジア人なのに、こんな命令に従わなければならなかった状況を…。そしてその後に、どんなことが起こるかを…。

父はよく、眠りについた後、隣に眠る母の首を無意識に絞めている自分に気づ

いて目を覚ましていました。信じられないことですが、この症状はベトナム戦争から戻ってきた軍人の間では、よくあることでした。自分が自分の妻に何をしてしまうかわからないことを責めた父は、離婚をも考えていたようです。幸いにも離婚は思いとどまり、父は後に司令官に任命されますが、それ以上昇進することはありませんでした。なぜなら、妻がアジア人だったからです。

平和な時代、私たち家族が様々な土地で出会った人種の違いを超える温かな「愛」。一方で父や私たち家族に深い傷を残した「戦争」と「人種差別」。これらの経験が、私のなかで反戦への思いを強くし、平和と反差別に対する情熱の源になっていきました。

4 人の子どもを育てるシングルマザーに

17 才になると私はイタリアとフランスの国境に近い、アルプス山脈の麓のマハリシ国際大学の学食で働き始めました。ここで私は妊娠し、アメリカのカリフォルニアに戻り 19 才の時に、第一子のデジャを出産しました。今考えると、当時貧しかったことが逆に幸運でした。病院に行くお金がなかったために、2 人の優しい助産師に見守られ、自宅で長女を出産することができたからです。出産から 2 ヶ月後の 9 月には子どもを抱えて、アメリカの大学に通い始めました。4 年後には長男のノエルを出産しました。この後に夫が私たちの元を去っていき、とても寂しい思いをしましたが、かわいい子どもたちが心の支えになってくれました。そしてハワイのマウイ島に引っ越しました。シングルマザーとしての苦労はありましたが、美しい海と自然を楽しみながら、幸せに暮らしていました。

その後、サマースクールの講師やお産に関する授業の講師として生計を立てながら、29 才のときに詩を教える教師になるために短大に戻り勉強をし直し、卒業後は学校で詩を教える仕事に就きました。

30 歳で出産に関する初めての著書を書き始めたころに次女のゾウ (Zhou) が誕生し、その 2 年後に第 4 子のお産で初めて、水中出産を体験しました。自宅の庭にプールを用意し、ジャスミンの香り満ちる夜、出産はスムーズに進み、わずか 1 時間 20 分で赤ちゃんは生まれてきてくれました。それは本当に素晴らしい経験でした。

4 人の子どもを育てるシングルマザーとしての生活は、決して楽ではありませんでしたが、子どもたちに囲まれた生活は楽しく、愛で満たされていました。

人はいつ死ぬかわからない、だからこそ私は「愛」に生きる

幸せな日々を送っていた私に、悲劇は突然やってきました。

私が34歳のとき、アメリカに住む妹が妊娠高血圧症で、お腹の赤ちゃんと共に命を落としてしまったのです。妹は体調不良を訴えていましたが、主治医は忙しいからと妹を診てくれず、病院から突き返されたその夜に息を引き取りました。もしもこの時、主治医がほんの1分でもカルテを見てくれたら、もし妹に寄り添ってくれる助産師がいて、妹を診るように主治医を説得してくれていたら、最愛の妹もお腹の赤ちゃんも、きっと救われたでしょう。

愛する妻と娘を一度に失ってしまった義弟、最愛の娘を若くして失った母…。2人が極限の哀しみのなかで涙する姿に心を痛めていた私を、更なる悲しみが襲いました。私の親友のブレンダと、私の子供を取り上げてくれた助産師のサニーが相次いでこの世を去ってしまったのです。短期間で愛する人を3人も失った時、どうしようもない悲しみのなかで、私は残された人間として、自分の人生の目的を考えました。考えに考えて、たどり着いた答えは「愛」でした。私の生きる目的は「愛」。この瞬間から私は、どんな時も「愛」に生きると心に決めました。

そして「愛」に生きると決めたとき、私の心は自然に助産師の仕事を選んでいました。私が幸せな出産を経験できたのは、私に寄り添ってくれた素晴らしい助産師たちのおかげです。でも妹には助産師がそばになくて、そして命を落としてしまいました。妹のような悲劇を二度と繰り返してはいけません。あんな辛い思いは、もう誰にもさせたくありません。だから私自身が助産師となって、残りの人生をお母さんと赤ちゃんのために捧げていこうと誓ったのです。

バリ島で私を待っていた、「助産師ロビン・リム」の予言

妹の死から2年後、私は交通事故で亡くなった親友ブレンダの夫、ウィルと再婚し、6人の子の母となりました。親友とウィルの間には5歳の娘・ラコタと、3歳の息子・トールがいました。母親を失ったラコタは、私の家に昼夜を問わずよく訪れるようになり、ウィルはそれをいつも申し訳なさそうにしていました。ラコタはそんなウィルを気にせずに、「私はまだ小さいの。小さいからお母さんが必要なの」といっていました。

2人は私によく「お母さんの話をして」と言いました。私は彼らの母親である親友をとっても愛していたので、2人のことも我が子のように愛しました。当時、家ではヤギを飼って自給自足のような生活をしていて、生活は楽ではありませんでした。子どもが2人増えて6人になることは全く問題ありませんでした。むしろ、賑やかになり、お手伝いの手が増えて嬉しいとさえ思っていました。やがてウィルもヤギの世話などを手伝うようになり、私たちは家族になったのです。

この頃から私は、子どもや年長者を神様に近い尊い魂として尊敬するような文化を持つ社会に身を置きたいと思うようになりました。調べてみると、家族を大切にするバリ島の美しく豊かな文化がまさに私が求めているものだとなり、私はウィルと共にバリ島のニュークーニン村への移住を決めました。ニュークーニン村はウブドの近隣の村ですが、当時は電力も水も限られるような場所でした。そしてこの村に、思いもよらない奇跡が待っていたのです。

1992 年、私がバリ島に来る 10 日前に、人々に慕われ長年多くの赤ちゃんを取り上げてきた年配いた男性の助産師が、「10 日後に私の代わりの産婆がやってくる」と言い残して息を引き取りました。ちょうど 10 日後、村にやってきた私に、予言を信じた村の人々は次々に「お産を手伝ってほしい」と頼みに来ました。

私が妹を失い、助産師になると決心したのをまるで知っていたかのような予言と不思議な縁に、これは私の天命だと確信し、妊娠していた第 7 子の出産後 43 日目から、昼夜問わず村のお産に立ち合うようになりました。

不思議なことは、他にもありました。ある日、私の子どもが、傷ついた 2 羽のフクロウの赤ちゃんを拾ってきました。私は毎日、エサを苦労して探しながらフクロウを育てていたのですが、通常、人家にはフクロウは居付かないそうで、村の人たちは誰もが私の家のフクロウに驚いていました。バリ島では、フクロウは助産師の象徴です。この一件もあって、村の人々は移住者の私を「村の産婆」として信頼してくれるようになりました。





そして、翌年には NGO 団体としてブミセハット国際助産院を設立しました。ブミセハットは「健全なる母なる大地」という意味があります。団体を設立したのは、安全で健康的な愛のある妊娠・お産・産後ケアを推進するためでした。当初はバリ人の助産師と共に自宅出産のサポートをしていましたが、出産中に命を落とす人が多いバリ島での現状を知り、妹の魂が私の背中を押しているかのように、助産院を設立したのです。

当時のインドネシアは、妊産婦死亡率が東南アジア諸国でも最悪の水準で、貧困層の妊婦は健診も受けることができませんでした。高い妊産婦死亡率の原因は、貧困でした。貧しくて健康な食事ができず、栄養不足が早産や大量出血を引き起こし、命を落としていたのです。医療の過剰介入も多く、病院が出産時間を短縮したいために、不必要に陣痛促進剤を使用し、帝王切開を行うことも問題視されていました。

貧しさが命を諦める理由であってはなりません。この現状を変えるために、私はアメリカで助産師の資格を取得し、1995 年に正式に法人化しました。そして 39 才の時に、寄付を集めて、24 時間 365 日、貧しいお母さんに無償医療を提供するブミセハット国際助産院バリ島クリニックを設立したのです。

大切にしたいのは「愛のあるお産」

ブミセハット国際助産院では、どんなに貧しいお母さんも無償で受け入れます。インドネシアでは、宗教や国籍によって差別されることもあります。もちろん宗教も国籍も問いません。出産後の入院費も無償です。そして全ての産婦に、授乳の仕方や産後のガイダンスを行います。

助産院ですから、お産はすべて自然分娩です。私は助産師になると決めてから、昔からの伝統的なお産など様々な文化におけるお産を学びました。そして、人間は本来、陣痛促進剤に頼らなくても、お母さんは「産む力」を、赤ちゃんは「生まれる力」を持っていると確信していました。だから助産師は、その「自然の力」をサポートをしてあげることが大切なのだと。

そしてこの「産む力」と「生まれる力」に大きく影響するのが、幸せホルモンとも言われるオキシトシンです。オキシトシンは陣痛を促進し、出産後は母乳の分泌を促します。つまりお母さんが幸せを感じ、たくさんオキシトシンが分泌されれば、「産む力」と「生まれる力」が促進されて、お産はスムーズに進みます。オキシトシンは陣痛を引き起こすホルモンですから、妊婦が出産のときに幸せを感じ、自らオキシトシンを分泌できていれば、人工的な陣痛促進剤を使う必要はありません。

だから私のクリニックでは、出産を迎えるお母さんがリラックスし、幸せを感じられるよう助産師がお母さんを励まし、抱きしめ、愛していることを伝えながら寄り添い続けます。そして赤ちゃんが生まれたら、お母さんを抱きしめ、お母さんと赤ちゃんのために祝福の歌を歌います。

赤ちゃんが生まれた後も、へその緒はすぐに切らず、少なくとも数時間待ちます。自然に赤ちゃんから離れるまで切らずに待つこともあります。これをロータス・パースと言います。へその緒をすぐに切らないことで、酸素や幹細胞がたくさん含まれる全ての血液が胎盤から赤ちゃんの体に送られるのを待つことができます。この胎盤の中の血液や栄養を赤ちゃんにしっかり届けることが、その後の赤ちゃんの健康に大きく影響し、赤ちゃんの人権である、と考えています。

そしてお母さんには、マッサージや鍼灸から、健全なお産、産後ケアと授乳サポートなど、あらゆるナチュラルケアを施します。へその緒からしっかりと血液と栄養をもらい、母乳ができれば、貧しいお母さんたちが粉ミルクを買えなくても赤ちゃんは健やかに育ちます。特にインドネシアでは、粉ミルクで育てられた赤ちゃんが生後1年以内に死亡する割合は、母乳の赤ちゃんに比べて300倍も高いのです。私たちは、赤ちゃんとお母さんがお産の時に神様から自然に授かったものがいかに素晴らしくポテンシャルに満ちているか、必ず伝えるようにしています。お母さんと赤ちゃんが家に帰ってから元気で生き抜いていくために。

どんな環境でも赤ちゃんは生まれるのを待ってはくれないから

バリ島にクリニックを設立して間もない2004年に、スマトラ沖大地震が発生しました。M9.1を記録し、その後発生した大津波によって死者・行方不明者が22万人以上となった大惨事のなかでも、出産を控えたお母さんがいると思うと私はいても立っても居られなくなり、被害が甚大だったバンダアチェの緊急支援を決めました。そしてすぐに医療チームを結成し、医療用テントなど必要な準備をして現地に向かい、仮設クリニックで診察を始めました。

お母さんたちは家を失い、心に傷を負っていましたが、どんな状況であっても赤ちゃんは安全で健康に生まれてこなければなりません。陣痛促進剤や電力やその他医療機器に頼らないブミセハット国際助産院流のお産は、医療器具が不足する被災地で大きな効果を発揮しました。復旧が進みつつも、バンダアチェのクリニックはその後も人々から必要とされ、財団からの援助も受けて、正式にクリニックを設立しました。今でもこのクリニックは、アチェの人びとに様々な医療福祉サービスを提供しています。

その後も私たちは、2010年のハイチ大地震、2013年のフィリピンのハイエン台風、2015年のネパール大地震、2017年インドネシアバリ島アグン山噴火、2018年インドネシアロンボク島大地震、同年インドネシアのスラウェシ島大地震において、災害緊急医療支援を提供しています。

地震や津波がすべてを破壊しても、赤ちゃんは生まれるのを待ってはくれません。でも、すべてを失った土地に、赤ちゃんが希望を運んでくれるのです。実際に被災して家族や家などを失い、希望を見失っていたお母さんが、仮設クリニックで出産して再び生きる希望を取り戻したこともありました。「愛のあるお産」は、すべてを失って絶望するお母さんの生きる力になることも、私は確信するようになりました。



仕事の紹介も、食糧支援も、養子も、できることはなんでも

「愛あるお産」の他に、私がもう1つ大切にしていることがあります。それは、「お母さんと赤ちゃんにとことん寄り添い、できることはなんでもする」ことです。

貧しく栄養失調のお母さんがいたら、産後自宅に様子を見に行きます。食べるものに困っているならば食料を、着る服がなければ服をもっていき、仕事がなければ仕事も紹介します。「針子をしていたけど、ミシンを買うお金がないから今は仕事がない。食べ物が買えない」と嘆くお母さんに、ミシンを買い与え、仕事を紹介したこともありました。

お母さんが栄養失調が原因で死産になってしまい、「埋葬費が払えない」と嘆く夫婦の代わりに埋葬費を肩代わりしたこともあります。診察にきていたお母さんが、陣痛で体調が急変して病院搬送され、医療費が払えず赤ちゃんが担保として病院に取られたと聞いたときには、弁護士を雇って赤ちゃんを探し、連れ戻したこともあります。貧しくて子どもを育てられないと嘆くお母さんに「子どもを養子にしてほしい」と切願され、その子を養子にもしました（それが私の8番目の子どもです）。

普通に考えれば、助産院がそこまでする必要はないでしょう。私も「何故そこまでするのか？」とよく聞かれます。しかし、私の答えはシンプルです。「愛」に生きると決めた私には、「困っているお母さんや赤ちゃんを放っておく」という選択肢はありません。助産師としてではなく、人として、私は常にお母さんと赤ちゃんが必要とすることに、できる限り応えていきたいのです。

こうして、お母さんや赤ちゃん、その家族の思いに応え続けた結果、25年以上前、小さなクリニックとして始まったブミセハット国際助産院のサービスは増え続け、今では一般医療、鍼灸・漢方などの代替医療、眼科検診、コミュニティ往診など医療サービスだけでなく、高齢者ケアや、助産師育成・奨学金制度、青少年への教育プログラム、村のリサイクルプログラムまでもを提供するようになりました。

何よりも素晴らしいのは、私たちの活動に世界中の多くの人が心を寄せ、助産院設立以来、すべての活動を寄付で賄うことができていることです。私の思いに賛同してくれる世界中の人たちには、どんなに愛しているといっても私の感謝は伝えきれません。





私がお母さんと赤ちゃんに寄り添うように 私にも寄り添ってくれる人がいる

しかし、正直にいうと、運営費の心配をしなかった夜はありませんでした。アメリカの CNN や、フィリピンの大統領から表彰され、私の活動が注目されるたびに寄付が集まりましたが、いずれも継続的な支援ではなく、この活動をいつまで続けられるのか、私はいつも不安でした。

しかし、2015 年に Earth Company と出会ってからは不安で眠れない夜がなくなりました。私がお母さんたちに寄り添い続けたように、今度は私に寄り添い続けてくれる存在が日本にできたからです。

そして 2016 年 10 月には、もっと多くの貧しいお母さんと赤ちゃんを診てあげるためのバリ島新クリニックが、日本を始め各国の支援で完成しました。その後、インドネシアのパプア州やフィリピンのパラワン島からの「ブミセハット国際助産院を開設してほしい」という切実な要望にも、日本からの支援で応えることができました。

2017 年から 2018 年にインドネシアやフィリピンを襲った自然災害の被災地での緊急支援も、私の思いだけでは実現できなかったでしょう。そして最近では、日本の不動産会社からの支援で、緊急時には避難所としても使えるユースセンターがバリ島ウブドに完成しました。

私がどんなに情熱を持って「愛」に生きても、それだけではケアは実現できません。私の思いを支

えてくれる支援あってこそ、寄り添うケアを提供することができます。子どもの頃に住んでいた日本、その日本の方々にこんなにも支えられていることに、不思議なご縁を感じています。その思いに応えるためにも、私たちは赤ちゃんが愛あるお産でこの世に誕生できるよう、活動を続けていきます。

多くの人が「愛」に生きてくれますように

愛のなかで産まれた赤ちゃんは、人を愛する力、信じる力を持っています。人を愛する力、信じる力を持った子どもが大人になった世界に、奪い合いや争い、暴力はありません。だから私は、世界平和は1人のお母さん、赤ちゃん、家庭から始まると本気で信じています。助産師は昼も夜もなく、いつ呼び出されるかわからない大変な仕事ですが、優しく愛のある社会のために、お母さんと赤ちゃんを愛で包む素晴らしい仕事だと誇りを持っています。

いつも、お母さんと赤ちゃんのことで頭がいっぱいの私は、クレイジーかもしれません。でもそれでいいのです。私は何と言われようと「愛」に生きていきたい。そして、どうか1人でも多くの人が「愛」に生きてくれますように。



13 気候変動に
具体的な対策を



14 海の豊かさを
守ろう



15 陸の豊かさも
守ろう



Impact Hero 2017

Kathy Jetñil-Kijiner

気候変動活動家・詩人

気候変動の影響の最前線に住む人々の思いを
世界に届けるメッセンジャー

2014年、115ヶ国544人の候補者の中から選ばれ国連気候変動サミットで詩を朗読し、世界の首脳陣から称賛される。COP（国連気候変動枠組み条約締約国会議）はじめ、多くの国際会議に登壇する傍ら、マーシャル諸島では、気候変動の影響で水没の危機にさらされる母国の次世代環境リーダーを育成するNGO ジョージクムを運営。国内で環境プロジェクトを推進し、世界に対して気候変動への対策を訴える発信力の高い若手リーダーを輩出している。

1000+

ジョージクムの活動に
参加してきた
次世代リーダー数(累計)

1082

キャシーが
太平洋島嶼国で行った
ワークショップ参加人数



KATHY'S STORY

質の高い教育を求めて移住したハワイ 待っていたのは人種差別の日々

私はミクロネシアのマーシャル諸島で生まれました。私の故郷は美しい国ですが、地理的に孤立しており、高等教育を受ける機会も限られていて、最高学府は短期大学しかありません。マーシャル諸島で初めて博士号を取得したのは、私の母でした。母は、娘の私にも質の高い教育を受けさせるために、私が6歳の頃にハワイへの移住を決めました。当時の私は、マーシャル諸島での幸せな日々を惜しむ気持ちと同じくらい、これから始まる生活への期待に胸を膨らませていました。

私はハワイを「可能性に満ちた新しい世界」信じていましたが、私を待っていた現実には、酷い人種差別でした。ハワイはとても美しい島ですが、私たちミクロネシアの出身者は、肌の色が違うから、名前が違うから、発音に訛りがあるから…という理由で馬鹿にされました。「ミクロネシアの人は猿と結婚するんでしょ？」というジョークさえあります。

こんな差別は初めてで、なぜ何も悪いことをしていないのに嫌われなければならないのか、子どもだった私には全く理解できませんでした。理不尽な人種差別に対するやり場のない怒り、悲しみがどうしようもなくなったとき、私はそれを詩にしていました。詩は私にとっては、自分の周りで起こっていることを理解し、気持ちを整理するための大切なプロセスだったのです。

「ポエトリーリーディング」と人生を変える出会い

詩を書き続け、詩の美しさや詩で自分を表現することに夢中になっていた私は、職業としてのクリエイティブ・ライティングを学ぶために、カリフォルニアの大学に進学しました。在学中、私はアフリカ系アメリカ人やアラブ系アメリカ人の詩を研究しました。そして詩を読んだり、書いたり、共有したりするポエトリーリーディングという手法で、人々が社会課題に関する意見を発信し、問題提起しているのを知りました。その活動を知り、「私だったらどんな問題に対して、どんな詩で表現することができるだろう？」と考えるようになりました。

音楽と同じように、詩は性別も年齢も超えてストレートに人の心に届きます。社会問題に関する人々の意識を高め、コミュニティを動かす手段になりえる詩の可能性を確信した私は、ポエトリーリーディングで世界に発信していきたいと思い、詩人として新しい道を歩き始めました。

10 数年ぶりに戻った母国で直面した気候変動の現実

当時は人種差別や、マーシャル諸島で行われた核実験に関する思いを綴っていて、気候変動についてはあまり問題意識を持っていませんでした。それが大きく変わったのは、2010 年、大学卒業後、故郷のマーシャル諸島に 10 数年ぶりに帰ってきた時のことです。私は、このとき初めて高潮を体験しました。その日、朝起きて外に出た時にみた光景は、信じがたいものでした。庭も道路も、見渡す限り水没していて、道の反対側にある叔母の家までいくため、足首まで海水に浸かって道を横切らなければなりませんでした。海面上昇を目の当たりにしたのは初めてで、私はショックで打ちのめされました。気候変動の影響は、将来起こるものではなく、今、ここで起きているもの。私の故郷は、海の中に沈んでしまうかもしれないのです。

マーシャル諸島の歴史や、昔から伝わる知恵を知る長老たちに聞くと、以前はこんな高潮は起こらなかったそうです。しかし今は、島中が水浸しになる高潮が年に数回も起こります。かつて私たちの生活と美しい海は調和していましたが、今では海が作物に損害を与え、先祖のお墓を粉砕し、私たちの家までも飲み込んでしまいます。



何千年も続いていた人間と自然との調和は崩れ、2008年には広範囲にわたる高潮で何百人もの島民が避難し、多数の家屋が損傷して公衆衛生状態も悪化し、緊急事態宣言が発令されました。一方で2016年には、今度は干ばつで6000人以上の人びとが1日1ℓ未満の水で生活することを余儀なくされ、再び緊急事態宣言が発令されました。今私たちの国は、史上前例がない「高潮と干ばつ」という両極端の被害に悩まされています。気候変動が、マーシャル諸島の生活を劇的に変えてしまっているのは、紛れもない、目の背けようもない事実でした。

それでも絶望は希望に変わる

初めて高潮を経験したとき、あまりにも大きな衝撃に私の心は落ち着かず、怒りや困惑、悲しみ、そして絶望をいったりきたりしました。今までもそうしてきたように、私はこの状況を自分なりに受け止めるために詩にしました。それが気候変動について初めて書いた詩「Tell Them」です。詩が完成すると、私は詩を朗読した動画を撮影し、Youtubeで公開しました。1人でも多くの人に、ここで起きていることを知ってほしい。そんな思いからでしたが、動画は瞬く間に世界中の気候変動活動を行う人々の間に広がり、その後、気候変動に関する国際的なカンファレンスに呼ばれるようになりました。

当時の私はまだ大学を卒業し、娘を出産したばかりでした。太平洋島嶼国のことは学びましたが、気候変動に関する科学的な知識はありません。でも詩という表現方法を通じて、普通なら会えないような専門家や、世の中を変えていくチェンジメーカーたちにマーシャル諸島の現状を伝えられるのだと実感しました。

この動画は、なんと在マーシャル諸島アメリカ大使館を通じて国連にも送られました。すると2014年、国連から「国連気候変動サミットの開会式で、世界をインスパイアする詩を新たに書いてほしい」と依頼されました。世界の首脳陣の前で気候変動の現状を訴える役として、115カ国544人の候補者から抜擢されたのです。

まだ26才だった私は、私の経験を通して、どうしたら各国の首脳陣をインスパイアできるか自問しました。彼らの心を動かし気候変動問題に向けて具体的な対策を講じてもらうにはどうすればいいのか。私自身にもインスピレーションが必要だったので、国連に「気候変動のムーブメントの写真をたくさん送ってほしい」と頼みました。送られてきたたくさんの写真に、私は衝撃を受けました。写真に写っていたのは、私たちのような境遇を救うために行動を起こしている世界中の人たちの姿。世界中の人がスクラムを組んで、多くの優秀な人が人生をかけて、この問題に立ち向かっていたのです！それを知って私は、「未来は変えられる」という希望を感じました。私は独りではない。子どもたちが生きる未来のために、地球を守るために闘う多くの仲間がいる。溢れるこの希望を、娘に伝えた

い。世界をインスパイアする方法はわからないけれど、自分の娘に未来への希望を語ることなら私にもできる。そんな思いで書き上げたのが、この「Dear Matafele-Peinem」です。

国連気候変動サミット当日、娘へのこの詩は、世界の子どもたちへのメッセージになりました。詩を読み上げると大きな拍手が会場を包み、開会式終了後、私は世界中の人に囲まれました。私の詩は、国境も肩書も越えて多くの人の心に届き、そして動かしたのです。この日私は、詩が地球を守ることに貢献する手段になりえるのだと知りました。そしてこの日を境に、私の気候変動活動家としてのキャリアが本格的に始まりました。



Dear Matafele Peinam,

ねえ、マタフェレ・ペイナム

きみは生後七か月 歯がなくて 朝日のように笑う

卵のような、仏陀のような つるつる頭

きみは雷のような太もも 稲妻のような泣き声

バナナが好き、抱きしめられるのが好き、

ラグーンに沿ってあるく毎朝の散歩が好き

ねえ、マタフェレ・ペイナム

朝日を浴びてのんびり輝く

あの眠たげなラグーンのことを

きみに話してあげる

いつかあのラグーンは私たちを

呑み込んでしまうって かれらはいのうの

海岸線をかじりパンノキの根っこを噛む

防波堤を呑み込み 島の骨までもぐもぐと食べ進む

かれらはいのう、きみも、きみの娘も、その娘だって

根無し草になってさまよい

故国と呼べるのはただパスポートだけ

ねえ、マタフェレ・ペイナム

泣かないで

ママが約束する

誰かがやってきてきみを食べちゃうなんて 許さない

政治の海を鮫みたいに泳ぎまわる

がめつい鯨みたいな会社とか

モラルの壊れたビジネスによる

淀んだ水でのいじめとか

目隠ししたままのお役所なんか

この母なる海を台無しにさせない

誰も溺れないし 引越していくこともない

ふるさとを失うこともない

地球温暖化による難民になんて

誰もならなくていい

少なくとも すでにそうってしまった人を除けば

というべきかな

パプアニューギニアのカートレット島のみなさん

ソロモン諸島のタロ島のみなさん

いまここでみなさんに謝っておきたいと思います

はつきりさせておかなくてはいけない

きみのママもパパも、おじいちゃんおばあちゃんも

きみの国そして大統領も、私たちはみんなで戦う

たとえこっそりと

プラチナ製の名札の陰に隠れた人たちが

私たちなんか存在しないふりをしても

マーシャル諸島、ツバル、キリバス、モルジブ

あるいはフィリピンを襲ったハイヤン台風

パキスタン、アルジェリア

コロンビアの洪水や すべてのハリケーン

地震、津波が

存在しないふりをしても

それでも私たちが手をさしのべ

拳を突き上げているのを

ちゃんと見てくれる人たちがいる

幟を掲げ メガフォンで叫び

私たちはカヌーの群れで石炭船を通せんぼ

私たちは太陽光発電パネルの輝き

私たちは昔ながらの農民の新鮮できれいな土

私たちはティーンエイジャーの指先から

花咲く署名活動

私たちは自転車に乗り、リサイクルし

大切に使う家族

夢をみて、デザインし、建築するデザイナー

絵を描き、踊り、書くアーティストたち

私たちは言葉をひろめてゆく

何千人もの人々が街路に出て

プラカードをもって行進

手に手をとって歌っている

たったいまの変化を求めて

みんなの行進はきみのためのよ

私たちのために歩いてくれる

なぜなら 私たちには

ただ生き延びる以上の価値があるから

努力し 道を切り拓く 価値があるから

ねえ、マタフェレ・ペイナム

すっかりまぶたが重くなったのね

さあ目を閉じて 私の赤ちゃん

ぐっすり眠ってちょうだい

きみをがっかりさせることはしない 見ていてね

(詩人・管啓次郎訳)

マーシャル諸島を襲う2度の悲劇

第二次世界大戦の約30年前、マーシャル諸島には多くの日本人が住んでいました。あまり知られていませんが、日本人の血筋は今でも残っていて、私の曾祖父も日本人です。

日本人とマーシャル人の関係は、開戦まではとても良好でした。しかし第二次世界大戦開戦後、状況は一転してしまいます。日本軍の占領下のマーシャル諸島は戦闘機の基地となり多くの地元住民が滑走路建設などの強制労働をさせられました。爆弾や手榴弾が島を破壊し、アメリカからの輸入がなくなったことによる飢饉と飢餓に人々は苦しみました。

終戦で悪夢のような日々が終わったとき、さらに酷い現実が私たちを襲いました。次にマーシャル諸島を支配したアメリカが、この美しい海で多くの核実験を行ったのです。ビキニ環礁やエニウェトク環礁では60回以上もの核実験を行われ、そのうちのブラボー実験は、広島に落とされた原爆の1000倍の破壊力がありました。島民たちは移住を強いられていましたが、それでも死の灰は周囲に降り注ぎ、放射能による被害が拡大しました。

それから何十年もたった今でも、核実験の影響は身体的にも精神的にも文化的にも深く残っています。核実験の後、多くのマーシャル諸島の女性たちが、放射能の影響で異常出産を経験しました。「ジェリーフィッシュ（クラゲ）ベビー」と呼ばれた骨のない赤ちゃん、亀の卵のような形の赤ちゃん、まるで腸のような見た目の奇形児を産み、モンスターと呼ばれた女性たちの苦悩を、皆さんは理解することができますでしょうか。「これでも人間なの？」と思いつつ、赤ちゃんにはとても見えない不気味なそれらをよく見ると、呼吸をしているのがわかる。それでも生きられるわけがなく、この悪夢を、何事もなかったかのように、狂気と恐怖と哀しみと懺悔と共に、ココ椰子の下に埋めなくてはならなかった女性たちのトラウマを。

世界中で、この苦しみを理解してくれる人たちがいるとしたらそれは日本の人たちかもしれません。日本も原爆の影響で、先天性異常の子供や異常出産を経験した深い苦しみを持つ女性がいて聞





きますから。

そして私たちは今、2度目の悲劇に曝されています。このまま平均気温が上昇を続ければ、極地で氷が溶け、海面が上昇し平均海拔2mのこの島は少しずつ沈んでいきます。再び強制移住を強いられれば、故郷の土地も長い歴史を持つ伝統文化も失ってしまいます。

核実験の場となったビキニ環礁は最もカヌーが盛んな島の1つで、非常に優れたカヌー文化がありました。しかし移住を強いられてから半世紀が経ち、カヌーを作る技術も、カヌーの漕ぎ手もすっかり失われてしまいました。気候変動により私たちがマーシャル諸島から移住を強いられることがあるとすれば、私たちはカヌーを作る技術よりもはるかに大きなものを失います。

このようにマーシャル諸島は、人類が生み出した「核」と「気候変動」という2つの脅威に日常的に晒されています。この国は、この先人類が迎えるかもしれない「終末」を、一足先に体験しているのではないかとさえ思うことがあります。そして世界が手遅れにならないために、警告を伝えるためにメッセンジャーの役割を課せられたのではないかと。

だから私の気候変動活動家・詩人としての活動では、マーシャル諸島のアートや言い伝えを使って、その脅威を訴えています。アートや詩は自分自身を開放させ、感情を豊かにし、人と繋がる手段になりえます。それは個人の思いや人々の絆の力を軽んじる社会では、この問題に向き合う有効な手段だと思っています。そしてアートや詩は、破滅に向かう時計の針を一時止めて、島に起こっている変化に思いを巡らせ、それを分かち合う役割も果たしてくれるのです。

世界を変えるには多くの若者が声をあげなければ

私たちマーシャル人は、声を上げなかったために核実験で島を失いました。その歴史を繰り返すわけにはいきません。故郷の島と何千年も続く歴史と豊かな文化を守るためには、私一人だけでなく多くの若者が国際的な場で、未来のために世界へ発信する必要があります。そんな思いから、2014年私はいとこのミランと共にジョージウムを設立しました。ジョージウムはマーシャル語で「あなたの家(場所)」を意味します。この名前には、私たちの「家」であるマーシャル諸島を守るために闘おうという若い世代への思いを込めました。

団体を設立をしましたが、私たちには資金もノウハウもなく、あるのは「愛する故郷を水没から守りたい、伝統文化を失う危機から故郷を守りたい」という強い思いだけでした。団体の活動は、若者たちへの気候変動に関する教育プログラムから始めましたが、実際に運営してみると思うようにはいかず多くの課題に直面しました。Earth Company に出会い、何回かの面接を経て IMPACT HERO 2017 に選出されたのは、ちょうどその頃でした。

その頃、私は国際的な会議やイベントに頻繁に登壇し、ヴォーグ誌からクリスティアナ・フィゲレス前国連気候変動枠組条約事務局長らと共に「Climate Warriors」(2015) に選ばれたり、CNN や National Geographic、Huffington Post など国際的なメディアに取り上げられたりしていました。しかし、それらがジョージウムの活動支援に結び付くことはありません。Earth Company が、継続的で本格的なサポートを申し出てくれた初めての団体で、この出会いには本当に感謝しています。

彼らは 2016 年には、モロッコで開催された国連気候変動枠組条約締約国会議 (COP22) への私の渡航支援をしてくれました。2017 年にはアスカとトモがマーシャル諸島まで来て、私と共同創設者のミランに対してワークショップを行い、団体のビジョン・ミッションの再定義や事業計画の立案をサポートし、組織運営上のアドバイスをくれました。そして活動拠点がない私たちのために、2017 年に私を日本に呼んでファンドレイジングキャンペーンを行い、ユースセンター設立のために 1000 万円以上の寄付を集めてくれました。このユースセンターは 2019 年 9 月に完成し、設立から 5 年、待ちに待った私たちの「ホーム」となる新しい活動拠点で教育プログラムやリーダーシップ研修、気候変動ワークショップを開催できるようになるのです。一連の支援を通じて、私はリーダーとしても気候変動活動家としても成長し、団体運営にも自信を持てるようになりました。ジョージウムは今、若者中心で気候変動問題に取り組む、国内で唯一の組織となっています。



それでも終末のシナリオは予想以上に早く訪れる…

2018 年、運営基盤を整え始めたジョージウムは、政府が行っている気候変動会議の第 2 回会議に参加することになりました。次世代のリーダーたちが気候変動に高い問題意識を持っていることに、私は大きな希望を感じました。しかし基調講演に登壇した気候科学者のチップ・フレッチャー博士から語られたのは、それさえも打ち消してしまうような絶望的な事実でした。博士は、海面上昇が進み、海拔が 1 フィート（約 30cm）上昇すれば、マーシャル諸島の空港が水没すると告げました。そんな酷い状況がこんなに早く訪れるとは誰一人想像しておらず、会場はどよめきました。ショックを隠せない私たちにさらに博士は続けました。「現在の地政学の見通しでは、平均気温の上昇を 1.5°C 以内に保てる可能性は極めて低い。この状況を受け入れ、人工島の建設を本格的に検討したほうがよい」と。

私は激しく動揺し、それが私たちに突きつけられた選択肢だとは到底信じられませんでした。しかし、IPCC（国連の気候変動に関する政府間パネル）も 2018 年 10 月の報告で「このままでは、2030 年にも地球の平均気温は 1.5°C 上昇する」と警告しています。

「1.5°C」という数字は、私たちマーシャル人にとって大きな意味のある数字でした。なぜなら、「産業革命以降の平均気温上昇が 1.5°C を越えると、マーシャル諸島は居住不可能になるだろう」と言われてきたからです。世界中で、多くの人たちが、気温上昇を 1.5°C 以下に抑えるよう、国際社会に訴えてきました。パリ協定でも「世界の平均気温上昇を産業革命以前に比べて 2°C より十分低く保ち、1.5°C に抑える努力をする」という目標を掲げていますが、もうすでに 1°C は上昇したと言われています。

そして今回、博士と IPCC の報告に、最悪の結末を迎えるのは遠い未来ではなく、わずか 10 数年後かもしれないという現実を突きつけられたのです。



せめて悲しませてほしい

率直に言うと、私はこれを聞いて 1.5°C への闘いを諦めました。世界中の人々が豊かさや便利さを求める経済活動のために、何千年もの歴史を持つ私たちの故郷は失われていく。この事実、私の希望は崩れ去りました。国が水没してしまったら、この国の民話や歌、伝統はどうになってしまうのだろう？私たちの大切な文化は、どうになってしまうのだろう？

気候変動は二酸化炭素が原因ですが、マーシャル諸島の二酸化炭素排出量は、全世界のたった 0.00001% です。それなのに、人工島という私たちには到底負担できないような対策を考えなければなりません。モルディブはいくつかの島を人工島にするために、百億ドル規模の投資をしました。でもマーシャル諸島は、太平洋に 29 の環礁と 1156 の島々が 80 万 km² にわたって広がっています。一体この費用を、どうしたらいいのでしょうか。

この話を私は、マーシャル諸島の現大統領である母と話し合いました。いつでも現実的な母は、「でも私たちは前に進まなくてはならないわ。あなただったら私たちにどうして欲しい？」といいました。「前に進まなければならないのは、わかっている。でも、もし私たちが 1.5°C という目標を諦め、人工島を建設するというのなら、この瞬間を胸に刻まなければならないと思う。この問題を当然のことのように捉えて、何事もなかったかのように前に進むなんてできない。当然のように何千年もの歴史と文化と、この土地を失う準備をするだなんて、普通じゃない！そんなことあっていいわけがない！」私は母のように割り切れませんでした。

前に進むことは必要です。現実、目を向けて、革新的に考えることも必要です。それはわかっています。研究結果も明らかにしている通り、今は最悪の事態に備えなければなりません。それでも、私はこの瞬間を深く胸に刻みたい。こんなときアートや詩が、私を救ってくれます。前に進むのは、人類はどうしてここまでできてしまったのかという問いに向き合い、生き抜くためにできる限りの努力を尽くし、これまでの闘いを深く心に刻んでから。歴史的な選択の前に、せめて悲しむ時間がほしいのです。

何千年も続くこの国と文化を諦めるわけにはいかない

世界各国で開催される気候変動に関する会議で、私はこの話を繰り返しています。しかし、正直に言えば、これは私にとって、気軽に話せるような話ではありません。本当は、いつも胸をえぐられるような思いがしています。もしこの話題を避けて通れるならば、どんなによかったでしょうか。

気候変動問題に取り組む人々の輪は年々広がり、励まされる一方で、トランプ大統領のパリ協定からの離脱表明や、このままでは地球の平均気温が 2030 年には 1.5°C に達してしまうという IPCC の

発表を聞いたたびに絶望的な気持ちになります。その度に私は取材され、意見を求められます。「諦め」の二文字が頭をよぎることもあります。多くの人たちが私の意見に注目してくれているので、感情のままに悲観的になることはできません。

とはいえ、心が折れそうになることは数え切れないほどあります。そんなとき私を勇気づけてくれるのは、核実験で被爆した1人のおばあちゃん存在です。彼女は被爆した影響で何度も流産し妹をも癌で失いました。想像を絶するような経験をしてきた彼女ですが、その悪夢を、何十年もの間、人々がこの悲劇を忘れないようにと、何度も何度も語り続けてきました。非核運動が大きな動きではなかった当時彼女が語り続けてこられたならば、世界が気候変動の解決に向かおうとしている今、私にできないわけがありません。

気候変動問題は、マーシャル諸島だけでなく、全世界に影響します。誰一人、他人事ではありません。私たちは、植民地主義、核実験を生き抜いてきました。だから気候変動も生き抜きます。しかし、この問題は私たちだけでは対応できないことも私は理解しています。日本のみなさん、マーシャル諸島の教訓は、同じ島国である日本にもきっと活かせます。ぜひ、みなさんの力を貸してください。共に立ち上がり、海面が上昇するのをただ見守るのではなく、一緒に解決していきましょう。



4

質の高い教育を
みんなに

10

人や国の不平等
をなくそう

16

平和と公正を
すべての人に

Impact Hero 2019

Wai Wai Nu

平和・政治活動家

7年間の刑務所生活を経て
民族の壁のない平和な社会の実現を目指す
ロヒンギャ出身の女性リーダー

「父親がアウンサン・スーチーと議会で一緒にいた」という、それだけの理由で家族全員が逮捕され、18歳から7年間に刑務所で過ごす。刑務所で社会的弱者の女性たちに出会い、「この国を変えたい」と決意。教育こそが自由や平和、社会的平等の扉を開き、民族間に信頼関係を築くと確信し、ミャンマー最大の都市・ヤンゴンにユースセンターを設立。様々な民族が共に民主主義やリーダーシップを学ぶプログラムを提供し、若手リーダーを輩出している。

2500+

2012年設立以降
ヤンゴン・ユースセンターで学んだ
若者の累計人数

400+

難民キャンプで
ウェイウェイが行う
教育プログラムで学ぶ
女の子の数



WAI WAI'S STORY

ロヒンギャであることを誇りに感じ、幸せだった幼少期

1986 年、私はバングラデシュとの国境に位置するミャンマー・ラカイン州の北部で生まれました。国民の大多数が仏教を信教するミャンマーで、イスラム教を信教するロヒンギャが住むこの地域にはたくさんのモスクがありました。ミャンマーには 135 の民族が住んでいますが、少数民族であるロヒンギャは、このラカイン州に居住区域を制限されて今も暮らしています。

ラカイン州は私が育った 1980 年代後半から 1990 年代前半にかけては、とても平和でした。私がラカイン州で暮らしたのは 8 歳まででしたが、その頃は「ロヒンギャへの差別」というものが存在することすら知りませんでした。たとえば私の父は、ラカイン州の中学・高校で教師をしていましたが、父にはロヒンギャ以外の友人もたくさんいました。当時は迫害などもなく、民族の壁を感じることもなく、とても平和だったのです。

しかし 1990 年代前半から、風潮が変わり始めます。政治家になった父は、ミャンマー政府によるロヒンギャへの制限が増えていきそうな雰囲気を感じ取りました。そして、このままラカイン州に住んでいては、将来子どもたちが教育を受ける機会も制限されるかもしれないと、1993 年に一家で当時の首都・ヤンゴンへ引っ越すことに決めました。

ヤンゴンに引っ越してからまもなく、父の予想通り、政府がロヒンギャの結婚・出産・移動を制限するようになりました。結婚の手続きは複雑化してお金を払わなければならない、簡単に結婚できなくなりました。1 組の夫婦に子どもは 2 人までと制限され、それ以上子どもを産んだ場合には最長 5 年の懲役を科せられました。移動も制限され、ラカイン州を出る時には届け出が必要になりました。

ロヒンギャへの制限が厳しくなってきたものの、ヤンゴンでの私たちの生活は穏やかで平和なものでした。8 歳からヤンゴンで暮らし、ビルマ族と同じ小学校へ通い、同じ大学に入学し、ビルマ族の文化や風習に馴染んでいた私は、一度もよそ者扱いされたことはありません。私と友人たちは、宗教も文化も違いましたが、それでも考え方においても行動においても、民族の壁はありませんでした。多くのビルマ族の友人に囲まれて育った私は、ロヒンギャが迫害され、異端民族のような扱いをされる将来がやってくることなど、本当に夢にも思っていませ

んでした。

それどころか、政治家として活躍していた父の影響で、私は小さいころから自分がロヒンギャであることを誇りに思ってきました。でもロヒンギャの友人たちは、民族としての意識を特に持っていなかったように思います。言い返せば、それだけ当時の私の周りの日常には、「ロヒンギャである」と認識させられるような差別もなかったのです。

18 歳まで、私は本当に幸せでした。ヤンゴンの学校に通い、いろんな民族の友人に囲まれて毎日が充実していました。あの日、真夜中に突然警察が家に押し入ってきて、わけも分からずに逮捕されるまでは。

不当逮捕され裁判もなく懲役 17 年に

2005 年、突然家に銃をもった 15 人の警察がやってきて、家族全員が逮捕されました。正直に言えば、あまりにも突然の出来事に、私は「自分は逮捕された」という状況を理解することすらできませんでした。

私たちの逮捕の理由は「政治家だった父が、アウンサン・スーチーと一緒にいたから」という、たったそれだけのことです。そんな理不尽な理由で、父は懲役 47 年、私や母たちは懲役 17 年を言い渡されました。裁判は密室で行われ、弁護士もいませんでした。どうしてこんなことがまかり通るのか理解できず、怒りがこらえきれませんでした。私たちの訴えは誰も聞いてくれません。大学 3 年への進級を目前に、ファッションやネイルが好きなごくごく普通的女子大生だった私の生活は、たった一晩で激変してしまいました。みなさんには想像できるでしょうか。ある日突然、何の前触れもなく連れ去られ、何の理由もなく 17 年もの刑務所生活を言い渡され、それに不服を言い立てることすら許されない絶望が…。

そしてその夜から、両親と姉と兄、そして私と、家族全員が刑務所で過ごす生活が始まります。その生活は恐怖以外の何ものでもありませんでした。私が投獄されたヤンゴンにある女子刑務所は、約 2000 人が収監されている悪名高い施設でした。大部屋に 100 人から 150 人が入れられ、私に与えられたスペースは、たたみ 1 畳ほど。きれいな水もなく、シャワーの水の量も制限され、食事は塩さえ入ってない味の無いスープとまずいお米でした。

家族はバラバラになり、政治犯として逮捕された父は、ヤンゴンから遠く離れた刑務所に収監されました。逮捕以来、一度も父とは会えませんでした。ずっと文通を続けていました。大学在学中に投獄され、すべての希望を失っていた私を、教師だった父は「刑務所の中にも、勉強への情熱は忘れてはいけない」と、常に励ましてくれました。



大学に戻りたい、学びたい、自由になりたい。刑務所にいる間、ずっとそう願っていましたが、刑務所では勉強もできず、労働などの義務もなく、ただ時間だけが過ぎていきました。何もすることがなかったので、私は同じ部屋にいる受刑者たちと話をしました。刑務所には、売春、薬物、ギャンブルなど様々な理由で逮捕された女性たちがいました。時間はたくさんあり、私は何百人、何千人という、本当にたくさんの人と対話を重ね、信頼関係を築いていきました。彼女たちの話を聞くうちに、「一度社会のシステムから抜け落ちてしまった女性が、再び社会復帰して生きていくことはミャンマーでは非常に難しい」という辛い現実を実感しました。

たとえば、ミャンマーでは、過去に売春の逮捕歴があると、出所後もまともな仕事に就くのは難しくなります。しかし、彼女たちは好きで売春をしているわけではありません。貧しく、教育の機会が乏しかったために他の仕事がなく、売春するしか生計を得る手段がなかった。そのような事実を、私は刑務所で初めて知りました。

生きていくための最後の手段が、売春しかない。私はミャンマーの貧しい女性が直面している課題を知り、女性が自立し、より力強く生きていける社会のための、女性のエンパワーメントに関心を持つようになりました。こうして刑務所のなかで、私は社会活動家としての第一歩を歩み始めました。

何千人もの女性受刑者と話した 7 年間に私のなかに生まれた「使命」

そして2012年。2005年の逮捕から7年経ち、私たち家族の逮捕の理由となったアウンサン・スー・チー氏の自宅軟禁が2010年に解かれてから1年がすぎた頃、国際社会からミャンマー軍事政権への批判が高まったこともあり、国際人権 NGO であるアムネスティ・インターナショナルによって、623人の政治犯が釈放になりました。私もその1人でした。17年の刑期を言い渡され、「釈放」という希望などまったく失っていた私には、それは夢のような知らせでした。

釈放が決まった朝、仲の良い刑務所の職員（私はその頃には、刑務所の職員とも良好な関係を築いていました）が私のところにきて、「ウェイウェイ、ビッグニュースよ！解放される人の名簿にあなたたちの名前が載っているわ！」と嬉しそうに言いました。私も母も姉も、同時に釈放されることが決まったのです！家族3人が一緒に釈放されるのはあまり前例がなかったので、私たちは心から喜びました。

そして、この釈放の知らせに、刑務所の友人たちも私のために涙を流して、まるで自分のことのように喜んでくれました。それが私には何よりも嬉しく、お互いに泣きながら抱き合って別れを告げました。

7年間、膨大な時間を共に過ごした仲間とは深い絆を感じていました。彼女たちと絆を築くなかで、私が痛感したことが2つありました。

1つは、ミャンマーの社会でいかに女性が不当に扱われているかということです。この7年間、私は刑務所で「どうして罪を犯したのか？」と女性たちの話を聞き続けました。そして、彼女たちが女性



というだけで不当な扱いや困難な経験を強いられ、その結果として法を犯すような手段でしか生計を得られなかったのだという実態を聞いた時に、「いつかここを出られる日がきたら、女性をエンパワーしてこの社会を変えたい」と思うようになっていました。

もう1つが、そのためにも教育が必要だということです。人は学ぶことで知識を身に付け、未来を切り拓く力を付けることができます。女性たちにもし教育の機会があったら、売春ではない他の仕事を見つけられたでしょう。

私自身も、刑務所生活で最も耐えがたかったのは、教育の機会を奪われたことでした。学ぶことが許されなかったからこそ、人生に希望を持つには教育が必要だと痛感していました。かすかな希望を失わないよう、私は刑務所に持ち込みを許された、数冊の英語の本を何度も何度も毎日繰り返し読んでいました。刑務所には学校の先生もいて、「私たちにも英語を教えて」というので、彼女たちに英語を教えていました。本当にささやかな時間でしたが、絶望の底に沈んでしまいそうになる私を救ってくれたのは、自らも学び、そして学ぶ意欲がある人に教えているこの時間でした。

この経験から、性別や民族に関係なく、誰もが教育を受ける権利を守られ、誰もが学ぶことに希望を持てる社会をつくろうと心に誓いました。

ついに釈放!しかし待っていたのは…

釈放後、私は念願叶ってすぐにヤンゴンの大学に復学できました。7年ぶりに刑務所から出て、民主主義の社会で自由を謳歌しようと希望に溢れていた私は、すぐに厳しい現実を知りました。

私が思い描いていた民主主義の平和な世界は、都市部のごく限られたエリートたちだけのもので、地方に住む人や少数民族には縁がないものでした。ロヒンギャに対する規制や差別は更にひどくなり、メディアには「ロヒンギャは肌が黒くて、野蛮である」と酷い記事が溢れていました。私たちはもう何代も昔からこの国に住んでいるのに、「侵入者」として扱われ、ロヒンギャへの憎しみは大きくなっていました。

そして、釈放された数か月後には、ロヒンギャに対する大規模な掃討作戦が行われました。何人もの男たちがロヒンギャであるというだけで殺され、女たちはレイプされ、そして多くの人が家を焼かれて行き場を失い、難民になりました。イスラム教の学校の子どもたちは生きたまま焼かれ、鬨り殺されました。ターゲットになったのは、ロヒンギャだけではなく、他の少数民族たちも、同じでした。

7年間の刑務所生活の間、私は塙の向こうには自由があると信じていました。しかし、塙の外にあったのはもっと残酷な世界でした。この状況を変えるために何かしたい。私はそう思って居ても立って



もいられなかったのですが、ロヒンギャに特化した団体は、反政府団体として扱われる恐れがありました。

そこで、7年間の刑務所経験で「女性をエンパワーしたい」「誰もが教育を受ける権利がある社会を作りたい」という使命も感じていた私は、釈放された2012年の年末に、女性支援に特化した団体「Women's Peace Network」を設立しました。女性の社会進出の支援であれば、政治的要素が少なく団体としても認められやすかったからです。

「何とかしたい」という思いのもと、まずは私にできることから始めました。それが、ヤンゴンのムスリムやロヒンギャの学生を対象にした、教育機会を得るための英語学習や、生計を得られるような職業訓練でした。

多民族国家のミャンマーは135の民族が生活し、40を超える言語があります。教育はビルマ語、高等教育になると英語が必要になるので、少数民族が教育の機会を得るには言語の壁を乗り越えなければなりません。特に英語教育は、刑務所での経験からその必要性を感じていました。活動資金は、私のビジョンに共感してくれたアメリカの財団の助成金で賄いました。

2013年は団体の活動を本格的に始めた年でもあり、大学を卒業した年でもあります。大学の卒業式にも、私は自分の使命を感じずにはいられない事件が起こりました。卒業式の朝、私は突然、「私には卒業証書がない」と告げられたのです。刑務所にいる間に、私の身分証明書が更新されていな



かったのが理由だったのですが、私以外にも卒業証書がもらえない学生が 300 人以上もいました。全員が少数民族の出身者で、同じように身分証明書を政府に更新してもらえなかったというのです。政府はロヒンギャだけでなく、他の少数民族の基本的な人権も制限しようとしているのです。

卒業証書がもらえないなら、何のために 4 年間勉強したのでしょうか。私は大学に掛け合い、私だけでなく他の 300 人以上の学生の分も卒業証書を出してもらおう交渉に成功しました。少数民族が不当に扱われ、差別されていても、きちんと話し合えば状況は変えられる。それを実感した私は、大学卒業後は就職ではなく、在学中に立ち上げた団体の運営に専念することにしました。

もし海外に留学し、そのまま就職してしまえば、より稼げたでしょうし、快適な生活もできたでしょう。しかし私は、ヤンゴンで家族と共に質素に生活する道を選びました。お金を稼ぎたかったら、それは後でもできる。だけど今は、この瞬間も苦しんでいる少数民族など社会的に弱い立場にある人たちを支援するために生きたい。それが私の選んだ生き方でした。

民族の垣根を超えた平和な社会は必ずつくれる

「Women's Peace Network」を設立した当初は、英語プログラムと職業訓練のみを行っていました。しかし、社会を変えるには若い世代が包括的に民主主義を学ぶ必要があると感じた私は、学生や女性たち、社会活動家を対象にした民主主義やリーダーシップを学ぶプログラムも開始しました。これは、少数民族や女性など社会的弱者だけでなく、ビルマ族も対象にしたプログラムでした。

子どもの頃、少なくとも私の周りに民族の壁はなく、私が感じていたのは差別ではなく民族を超えた友情でした。だからきっと、今だって若者たちと一緒に話し合い学び合えば、民族の垣根を超えた平和な関係が築けるはずです。

実際に、プログラムに参加したあるビルマ族の少年は、プログラム終了後に「軍人の親の影響もあり、今までロヒンギヤを差別していたけれど、ここで（少数民族の）みんなが温かく接してくれたので、考えが変わった」といってくれました。

このように1人1人の意識が変わり、1人1人の人間関係が変われば、民族間の差別や争いはなくしていけるでしょう。私はこの活動が、次世代の若者たちの間に民族の壁を超えた信頼関係を築くプラットフォームになりつつあると、確信が持てるようになりました。

民族の垣根を超えて一緒に学ぶ機会が、ミャンマーでは非常に稀だったため、助成金を得ながらなんとか続けていたこの活動は世界的に注目されるようになり、プログラムを始めてから1年あまりの2014年に私は「BBCが選ぶ世界で100人の影響力のある女性」に選出されました。その後も数々のメディアから取材され、賞をいただきました。活動の注目度も高まり、ついに2016年には助成金を得て、活動拠点となるユース・リーダーシップ・センターをヤンゴンに設立できました。

その後も2017年には、TIME紙が選ぶ「次世代リーダー」として選ばれ、2018年には世界経済フォーラムの「ヤング・グローバル・リーダー」に選出されるなど、私は国際社会で登壇する機会も増えていきました。







私に変革を起こす理由

華々しい経歴に聞こえるかもしれませんが、私はこの時期、一方でどうしようもない苦しさも感じていました。ミャンマー国内でのロヒンギャへの迫害が、一層深刻になっていったからです。2017年8月の大規模な迫害の後、多くのロヒンギャがバングラデシュの国境近くのコックスバザールに避難し、今も91万人が難民として生活しています。

私はこのニュースの後、2018年にコックスバザールに向かいました。そして教育が行き届かない現地の状況を目の当たりにして、自腹で女の子たちに対する教育プログラムの運営を始めました。400人が学ぶこの授業は、夕方から行われます。わざわざ夕方にしたのは、この時間帯に大人の目が届く「場所」を作り、そこに通ってもらうことで、売春に巻き込まれる女の子を少しでもなくしたかったからです。難民キャンプでの教育環境は十分とはいえません。でも、彼女たちが大人になったときに仕事に就けるよう、私にも何かできることをしたかったのです。

ロヒンギャへの迫害は私の身内をも襲い、ラカイン州にすむ祖母やいとこの村も襲撃を受け、すべてを失いました。どんな迫害にも耐え、愛する故郷ラカイン州を絶対に離れようとしなかった90歳の祖母でさえ、ロヒンギャを取り巻く状況の悪化に「ウェイウェイ、どこへでもいいから私を連れ出して」と頼むのです。あの祖母まで希望を失い、そんなことを言うなんて…と私は、自分の無力さと祖母の無念さを痛感すると同時に絶対になんとかしなければならないと決意を新たにしました。

ロヒンギャをはじめとする民族の問題はあまりにも複雑で、解決への道は容易くはありません。特にコックスバザールのロヒンギャ難民問題は、世界最大の難民キャンプとして、多くの課題を抱えています。

それでも私は、本当の民主主義の国に暮らすという希望を捨てるわけにはいきません。希望を捨てたら、あの刑務所での生活のように絶望しかなくなってしまいます。それがどんなに辛いか知っているからこそ、たとえ困難であっても未来を諦め、少数民族の苦しみや涙をこのままにはしておけません。

私は、どんな民族でも性別に関係なく人権が尊重され、表現の自由があり、同じ権利を持って平等に扱われる、そんな社会をつくりたいのです。私たちは、問題を解決し、民主主義をもたらしてくれる偉大なリーダーが現れるのを待つ必要はありません。私たち1人1人が変われば、それは実現できるのですから。

若い世代は、そんな未来を実現する希望です。今、私たちが彼らをきちんと教育すれば、今から10年後、20年後、30年後の未来には彼らがリーダーとなって国を変えてくれるでしょう。

"Be the change what you want to see."

その未来を信じて、私は変革を起こし続けます。



Impact Hero 2021

Arief Rabik

環境活動家・竹専門家

竹への揺るぎない情熱と画期的なイノベーションで、
人類の未来を脅かす気候変動、土地荒廃、貧困、
ジェンダー格差の同時解決に挑む。

著名な環境活動家であった母の遺志を継ぎ、母が設立した
Environmental Bamboo Foundation (EBF) の代表を務める。
インドネシアが直面する数々の深刻な課題の同時解決に取り組む
ため、「1000 のバンブービレッジ」を立ち上げ、竹による土地再生、
木材の代替品となる竹材の生産と普及をさせる。

1000のバンブービレッジが
できると…

210万
の農家を雇用

200万
ヘクタールの荒廃地を再生

インドネシアの

CO2排出量 **16%**
にあたる
年間100メガトンを削減



ARIEF'S STORY

意志あるところに道は開ける

今から 40 年前私は、体重わずか 900g でこの世に生まれました。私の母は、予定日より 4 ヶ月も前にお産が始まり、バリ島から緊急搬送されたオーストラリア・シドニーで、小さな小さな私を産みました。肺が未発達だったため、医師は私に激しい運動をさせないようにと忠告しましたが、母はそのアドバイスに従わず、子どもの私が望むままに走ったり遊んだりさせ、海にもよく連れて行ってくれました。強靱な精神の持ち主である母は、未熟児で産まれたことが私の人生の障害になるのを、決して受け入れなかったのです。そんな母のおかげか、今私は皆と同じように息をし、サーフィンも、ハイキングも、登山だってできます。

母は南アイルランドの国境近くで、アイルランド系スペイン人の貴族の家系に生まれました。彼女には先天性疾患があり、子どもの頃は失読症で学習障害もありました。でも頑固で好奇心の強い彼女は、幼い頃から反骨精神に溢れていました。親に学校に行くと言って家を出ては、よくジプシーの人々と一緒に過ごし、遊牧生活の話を聞いていました。

母は 10 代の頃スペインでしばらく暮らした後、ウェールズで建築設計を学びました。その中でインドネシアの織物に出会い、その伝統文化の多様さ、豊かさにすぐに魅せられました。伝統織物への情熱が彼女をインドネシアに向かわせ、1970 年代、ちょうど最初の外国人移住者の波と同時期に、バリ島に到着しました。彼女は自分のビジネスに集中し、どんな問題が起こってもくじけずあきらめず、常に解決策を見出そうとするタイプの人でした。

一方、インドネシア人の父も、なかなかの不屈の精神を持った人でした。父は 16 歳の時、一連の不幸な出来事によって、突然家を出なければならなくなりました。幸いなことに、父の叔父が彼の境遇を哀れみ、屋根瓦工場の仕事を与えてくれ、また法律を勉強するための金銭的サポートもしてくれました。

父はとても歯に衣着せない物言いをする人で、それで他人との関係に摩擦が生じることもしばしばありました。大学時代、彼が法律の期末試験に 20 分遅れて到着した時、彼の態度に腹を立てた講師は彼が試験を受けることを拒否し、この一単位を落としたことで、法学位を取得することができませんで

した。その後彼は海軍に入ることを勧められ、6 か月ほど試してみましたが、結局自分には向いていないと判断し逃亡。1960 年代半ばにバリ島に上陸し、家具製造とアンティーク家具改装のビジネスを始めました。彼はこのビジネスを成功させることを決意し、その目標を達成するまで、他には目もくれず一心に努力したのです。



自然が居場所だった子ども時代

遠く離れた国で生まれ育った父と母。それぞれ非常に保守的な環境から飛び出し、反骨心と冒険心と強靱な精神力で人生を開拓してきた二人がここバリ島で出会ったことは、運命的な出来事でした。最初はビジネス・パートナーとして始まった二人の関係は、その後特別なものになり、家族になりました。

しかし私が2歳の時に両親は離婚。母は2歳年上の兄を連れて、健康問題があった彼の治療のためにイギリスに移りましたが、私は父とインドネシアに残りました。幼い頃の私は、森の中を自由に歩き回って自然に浸ることが大好きでした。そして7歳になった時には、すでに67種の竹の名前を全て覚えるほどになっていました。当時のバリ島の緑豊かな森での冒険が、私の生涯にわたる竹への情熱を育てていったのです。

数年後、バリ島に戻ってきた母たちと再会。母の希望で、私はバリ島のインターナショナルスクールに入学しましたが、8歳の時、外国籍の親を持つ児童は国内の学校に通えないというインドネシア政府の方針が導入され、学校から追い出されました。それを受けて母は、当時懇意にしていたロビン・リム（IMPACT HERO 2016）に教鞭をとってくれるように頼み、ロビンが自宅

の近所で始めた小さな学校に通い始めました。

母は教育をとて重視していたので、できるだけ良い教育機会を求めて、私たちに合う学校を世界中から探していました。奨学金を取り付けては、シンガポール、その後オーストラリアの学校に通いましたが、残念ながら私は都会の学校生活に馴染むことができず、辛い日々を送りました。そして最後にたどり着いたのが、アメリカのコロラド州で、ロッキー山脈の雄大な自然に囲まれた、生徒数 200 人ほどの小さな学校でした。私はすぐにこの自然に恵まれた環境と、学校でのスポーツ、ロッククライミング、サーフィンなどの活動に夢中になりました。やっと自然の中で穏やかな気持ちで過ごせる場を見つけることができたのです。



広がる竹の可能性～バンブー・ビレッジ構想の始まり

父との離婚後、母は竹の事業を始めることに力を注ぎました。彼女は竹産業を振興するための「バンブー・ビレッジ」をバリ島とジャワ島に 17 か所つくり、そこで生産・加工した竹製品をヨーロッパに輸出しました。これがきっかけで竹職人との接点が増え、彼らが多くの苦悩を抱えていることがわかりました。ビジネスをどう持続可能にするか、質の高い竹とはどんな状態のものなのか、竹にそもそも需要があるのかなど、彼らはちゃんと理解することができずに、混乱していたのです。

1992 年、ヌサトゥンガラ州東部のフローレス島を襲った壊滅的な地震により、少なくとも 2,500

人が死亡、500人以上が負傷し、90,000人が家を失いました。それは数十年で最大かつ最悪の自然災害でした。地震の後、私の母は、インドネシアの近代建築の父として知られるロモ・マンガンとともに、中央フローレスのンガダ県で支援活動を始めました。地震は正午過ぎに発生したので、幸い学生たちは校庭にいましたが、彼らは校舎が完全に崩壊するのを目の当たりにし、恐怖に駆られていました。

子どもたちが二度とそのような経験をしないですむよう、母とロモ・マンガンは耐震構造を持つ学校を350校設計しました。強度と柔軟性をあわせもつ竹を活用したこの事例を、母は世界銀行、米国国際開発庁 (USAID)、その他多くの援助団体に持ち込み、災害リスクの軽減における竹の重要な役割を強調し、プロジェクトのための資金を調達しました。

翌年母は、NGO 団体 Environmental Bamboo Foundation (EBF) を設立。竹を粉末化する害虫ヒラタキクイムシの商業的処理方法について画期的な研究を行いました。この研究結果は後に、木材に取って代わる建材として十分な耐久性のある竹を作る技術開発につながりました。

1995年、母はンガダ県に戻り、竹がその文化や生活に深く根付いているいくつかの先住民コミュニティと協働を始めました。彼女は村の人びとと緊密に協力し合い、「Plant A Million Bamboos (100万本の竹を植えよう)」と呼ばれるプログラムを開始しました。このプログラムはその後数年にわたって発展しましたが、アジア金融危機がインドネシアを襲ったことで、最終的に停止を余儀なくされました。このプログラムを通して植えた100万本の竹のうち、およそ60万本が生き残りました。当時の私は、いずれこの60万本の竹を元に自分自身のプロジェクトを開始する事になるとは、思いもよりませんでした。



竹の専門家としての歩み

私は10代の頃から、時間を見つけては母と一緒にインドネシア各地の農村をまわり、EBFの活動に関わってきました。母がコミュニティの人たちとどのように接し、どううまくビジネスを進めているのかを傍で見て得た学びは、後に自分がコミュニティでの竹事業を始めた際に、大きな助けとなりました。

オーストラリアの大学では無機環境化学を専攻し、在学中に、休学しては複数の竹や環境に関わるプロジェクトに参画したことで、特に技術的、科学的な竹の世界での経験を積むことができました。そのおかげで後年、EBFの活動のなかでも母が関わっていたがなかった技術的、科学的な側面を担っていくようになりました。

在学中、休学してベルギーの竹組織培養研究室でも働きました。EBF以外で竹に関する専門的な仕事をしたのはこれが初めてで、世界中の竹の専門家たちの巨大なネットワークとつながったことは、大きな財産となりました。また、USAIDのフィールドケミストとして、ジャワ島の養鶏場から出る有毒な排水を処理するため、人工湿地濾過システムを使った13の排水処理施設を建設する仕事にも就きました。しかし感染症の蔓延によりプロジェクトの中止が決まり、私は一人で現場に残って最後までやり遂げようと交渉したのですが、結局止められてしまいました。この経験もまた貴重な学びの機会でした。

こうして6年間の大学生活をようやく終える頃、私の人生において最も重要な人物の一人、ベン・ブラウンに出会いました。マングローブ林の保護や持続可能な地形作りの専門家であるベンは、私に社会生態システムの観点から人間と自然の関係性を分析する考え方を教えてくれ、これはその後私の仕事の礎となりました。2012年にはベンと一緒に本を出版し、その技術は、竹林管理に関わる多くの人びとから注目されました。

ベンと私はまた、竹の管理方法に関するイニシアチブも始めました。第二次世界大戦前のインドネシアには2,000万ヘクタールの竹林があったのに、それが現在200万ヘクタール未満に減少したことに注目し、新しく竹を植える前に、既にある竹をどう管理・維持するかに着目すべきというメッセージを伝えたかったのです。「Sustain a Clump」（「塊を維持せよ」という意味）と名付けたこの管理方法に関して私たちが作成した詳細なマニュアルは、様々な草の根団体や国際機関に活用されました。これが、コミュニティ林業の概念が形になり始めたきっかけです。そして2006年私はついに、母と私が長年にわたり蓄積した知見や開発した技術をもとに、インドネシア初の持続可能な竹工場「インドバンブー」を立ち上げました。

私は生涯を通じて、周囲から学んだ起業家精神を受け入れ、常に「進め、進め、振り返るな」をモットーにしています。竹に関する技術をマスターするために長年試行錯誤を繰り返す中で、それはたくさんの失敗がありましたが、失敗も人生の重要な一部だと見なし、ポジティブなことも

ネガティブなことも合わせた全ての経験を通して、貴重な教訓を学んでいます。もし失敗しても、いつでも助けを求めることができる仲間たちがいるので、安心して挑戦することができます。

母と私は、たくさんの学びや協力を得て、竹に関するノウハウを培ってきました。私たちのアプローチは一見新しい方法のように見えるかもしれませんが、実は数々の先駆者たちがこれまで培ってきた知見があってこそその進化だということを、常に忘れないようにしています。



トリ・ヒタ・カラナ～自然、神、人間の調和

自分の人生を振り返ってみると、私という人間が形成される中で最大の影響を与えた2つのことがありました。それは、革新的で創造的な先駆者である母と、バリの人々です。

幼い頃から、外国人女性の環境活動家である母が、インドネシアで変革を起こそうとすることを見てきました。母のアプローチややり方は時に非難され、よく打ちのめされていました。しかし母は一度も諦めず、常に元気で無私無欲で、自分ではなく一緒に仕事をしている人たちに賞賛を与えていました。母は自分が脚光を浴びるよりも、舞台裏で活発に役割を果たし、人々を結びつけ、若い世代の声を引き出すことを好みました。人々をインスパイアすることが大好きで、根本的に謙虚な人でした。自分自身よりも前に他人を助けることは、常に彼女の優先事項で、ごく自然にそうしていました。私は自分の全ての言動に母の精神を具現化し、母の情熱と謙虚さを再現しようとしています。

私の人格は、母と母の仕事によって深く形作られたのと同様に、バリの文化にも大きな影響を受けました。私は、伝統のスピリチュアルリーダーが初めてバリの哲学「トリ・ヒタ・カラナ」を教えてくれた時から、これにとっても共感しています。それは、

自然との調和

神々との調和

人間同士の調和

という「幸福の3つの要素」として解釈されます。私はバリ島で育ち、人生のほとんどをここで過ごしたので、この考え方は私の体に染み付いています。私はすべての神々を信じて寺院にお参りします。側から見たら私はハーフですが、私は自分自身がバリ人であり、今日までバリの文化の多くを受け入れていると心から信じています。

幸せを感じる場所

私は、私の人生において両親から特定の道を選ぶようプレッシャーをかけられたことはありませんでした。彼らはいつも私に自分の道を選ぶように勧めました。父の考え方は、あらゆることをちょっとずつ試してみて、自分の情熱がどこにあるのか、何が自分を惹きつけるのかを見つける、一度見つけたらやりとげるというもの。一方母は、宇宙のエネルギーを感じ、導いてもらうこと、今この瞬間に集中し、状況を読むことに重点を置いていました。

若い頃と同じように、自然に浸りきって新しい葉が芽吹くのを見るたびに、私は幸せを感じます。日々の仕事に追われてしまうこともありますが、自然に溶け込み、心身ともに充電する時間を意図的に見つけることが、私にとって必要だと改めて感じます。

両親は二人とも大変な仕事中毒で、兄も私も、人生を通して彼らと過ごした時間は多くはありませんでした。幼い頃から一人の時間を自然の中で過ごすようになったことが、私が自然を好きになったきっかけです。年を重ねるにつれ、本当に幸せだと感じるのは自然の中だけだと気づき、スポーツをしたり、森をハイキングしたりと、屋外で過ごす時間が増えていきました。私と自然との深いつながりから、母の竹の仕事に携わるのは自然なことでした。それは、私がある意味彼女の兵士であり、守護者であり、情熱の担い手であったからだろうか、と感じるものが時々あります。また一方で、母の仕事を受け継いだのは、地球を救い、人々が竹の利点を理解するのを助けたいという、私自身の燃えるような情熱によるものだとも感じています。

そんな情熱的で強靱な精神を持った母が2000年に、膵臓がんと診断されました。このニュースは家族、友人、地域の人びとに衝撃を与えましたが、母は当然、この診断結果が自分の人生を支配することを拒否し、仕事に積極的に取り組み続けました。しかしがんとの勇敢な闘いの後、母は愛する家族に囲まれて、2017年1月3日に亡くなりました。彼女の親友であり、インドネシアで最も有名な写真家の1人であるリオ・ヘルミは、母の死についてこう語りました。「一つの時代が終わった。ウブドを変えるほどの影響力を持った時代が。レジェンドは逝った。」と。



竹で未来を変える

現在、地球の地表の 25% がすでに荒廃しているとされており、世界人口の 4 割がその被害を受けています。そしてそのほとんどが農村地域の農民や最貧困の人たち。このままでは、2050 年までに地球の土地面積の 95% が荒廃する、と予測されています。

森林は、破壊されると、そこから大量の温室効果ガスが放出されます。現に森林の減少・劣化は、人間活動が排出した CO2 総量の約 32% を占めており、インドネシアは世界で 5 番目の CO2 排出国。しかし竹は、この現状を覆すポテンシャルを持っているのです。

世界で最も急速に成長する植物である竹は、鋼と同じくらい硬く、コンクリートよりも強く、耐水、耐火、耐震性もあります。竹は世界で最も持続可能な建材であり、気候変動対策の真のチャンピオンでもあります。炭素隔離率が高く、1 ヘクタールあたり年間 50 トンの炭素を吸収します。農民にとっては広葉樹の代替としての役割を果たし、森林破壊の削減に貢献します。さらに、竹は荒廃した土壌や急な斜面でも成長する可能性があり、地滑りの影響を減らすことさえできるため、土地の回復において強力な味方です。EBF は、これらのメリットをできるだけ多くの人々、特にサービスが行き届かない脆弱なコミュニティの人々と共有することに重点を置いています。

今日、私は 2015 年に EBF が開始した、インドネシア全土に 1,000 のバンブービレッジを設立するプログラムを主導しています。このプログラムの最大の目標は、農村コミュニティ、特に女性たちが経済的に自立できるようにすること。また、2036 年までにさらに 9 か国に拡大し、10,000 のバンブービレッジをつくることも目指しています。私たちにとって竹は、環境の持続可能性だけでなく、人々が貧困の悪循環を断ち切ることを可能にするものでもあります。

私が最も喜びを感じるのは、バンブービレッジの可能性について人びとが納得し、彼らの胸の内に火花が起こるのを感じる瞬間です。農家の人びとと協力して解決策を考え出すだけでなく、彼らの竹の可能性を解き放つ手助けをすることには、計り知れない価値と満足感があります。多くの人びとの意見やニーズを把握して常に落としどころを見つけなければならない仕事のなかで、私はよく「母だったらどうしただろう」と考えます。それによって、私自身が母に近づいているようにも感じます。



引き継がれる想い

私が竹と共に歩んできた年月は 20 年になります。今、私の妻は常に EBF をサポートしてくれていますし、3 人いる子供のうち 12 歳の長男は、竹のサーフボードをデザインしています。私たちにとって、竹は間違いなく、多世代にわたって家族に受け継がれているもののなのです。

母が竹と共に歩んだ 40 年間、私たちのムーブメントは大きなネットワークに成長し、常に新しい協働が生まれてきました。協働こそが、私たちが行うこと全ての核となるのです。私たちのアプローチの基盤であり、バンブービレッジそのもの。私たちが種を撒き、人びとの中で醸成されていてほしいと思うのは、この協働の精神なのです。

そういう意味では、表土を縫い合わせ、水を吸収し、社会的にも生態系にも素晴らしい価値を提供できる竹は、まさに協働と再生を描いた美しい絵画のキャンバスと言えます。正しく使用することで、世界で最高のキャンバスになるのです。しかし、竹を植える時に密集させ過ぎたり季節を間違えたりすると、さまざまな問題が発生します。地域社会とうまく連携しないと、そこでもさまざまな問題が発生します。正しくやりさえすれば、素晴らしいことが起こるのです。

私たちが守ろうとしている熱帯雨林は、地球の生命維持システムの基盤。健全な森なしに、人類は生き延びることができません。森林の消失を食い止めることは、生態系そして私たち人類を救うことなのです。

竹が、地球を救う。といっても過言ではないのです。



HOW TO DONATE

IMPACT HERO 全員を支える Earth Lovers になる

Earth Lovers は、月額 1000 円から現在支援中の IMPACT HERO の活動を継続的に支える継続寄付制度です。「EARTH LOVERS」にご登録いただくと、現在支援中の IMPACT HERO 全員の活動を毎月継続的に支えることができます。

URL : www.earthcompany.info/ja/monthly-supporter

QR コード :



バリ島のエシカルホテルに宿泊して支援する

太陽光、雨水利用など利用した持続可能な施設で、命を育むレストランや、買うことで社会が良くなるショップを併設している Earth Company の世界観を体現したバリ島ウブドのエコホテル「Mana Earthly Paradise」にご宿泊いただくと、宿泊料の一部が IMPACT HERO への支援活動費への寄付になります。

URL : www.manaubud.com/

FB: manaubud

Instagram: manaubud

QR コード :



HOW TO GET INVOLVED

個人として参加できること

詳しくは弊団体ホームページ (<https://www.earthcompany.info/ja/donate/>) をご確認ください。



古本を寄付する

本棚のいらなくなった本を「古本チャリティ基金」に送っていただくと、査定額に 10% 上乗せした金額が Earth Company の活動資金として寄付されます。送料無料ですので、読み終わった本を社会貢献にぜひお役立てください！



いらないお宝を寄付する

未使用の図書カードや商品券、貴金属やブランド品など、ご不要になった物を「お宝エイド」に送っていただくと、査定額に 10% 上乗せした金額が Earth Company の活動資金として寄付されます。送料無料ですので、不要品を社会貢献にぜひお役立てください！



T ポイントを活用して寄付をする

Yahoo! 募金を利用し、T ポイントを活用して寄付をすることができます。



**BE THE CHANGE
YOU WANT TO SEE
IN THE WORLD.**



一般社団法人 EARTH COMPANY

Tokyo Office

東京都港区南青山 2-15-5 FARO 1F
TEL: 03-6753-1558

Bali Office, Mana Earthly Paradise

Banjar Mas, Sayan, Ubud, Gianyar, Bali, Indonesia

EMAIL: contact@earthcompany.info

URL: www.earthcompany.info

Design/ Yesyurun Rudolf Saulus

Special Thanks/Shinobu Nishizawa

2022 年 10 月 6 日発行

